

# アチックミュージアムの研究における渋沢敬三のポジション

——イトマン・移動・出漁を事例に——

The Position of Keizo Shibusawa in Attic Museum Research

Itoman, Migration and Boat Fishing as Case Studies

小林 光一郎

KOBAYASHI Koichiro

## 要 旨

渋沢敬三はアチックミュージアム（以下、アチック）を設立し、且つ自身も研究を行いながら、アチックという団体・組織での研究や資料の収集・整理とその開示・提示という目標の下、一つの事象に対する総合的・客観的な姿勢、即断しない慎重な姿勢を基本に、彙報やノートといった報告書や資料、自身が撮影した写真や16ミリフィルムの映像などを残した。

調査において敬三は、自身の社会的立場や人脈・情報網を駆使した調査や調査者間の仲介などを行い、調査地においては写真や16ミリの撮影に専心していた。この敬三撮影の写真や16ミリからは、被写体として当地の人々を写しこんだ撮影、駅表示板などの調査記録を残すという編集・上映も視野に入れた撮影という特徴などがあげられる。これは資料集や報告書の刊行だけでなく、写真や16ミリも資料の開示・提示の一環として考えていたという証左でもあるが、自身をとりまく状況から研究者としての限界を自覚し、直接的な調査活動よりも調査記録を主に担当していたことを示していた。

敬三はこのようなポジションに自身を置きつつも、自身の研究への「意思」を、アチックの「意志」として誘導もしていた。その具体的な表れの一つに「イトマン」（イトマンとして括られる人々や、漁民、船、あるいはこれらの移動・出漁などを指す概念）に対する関心や研究があり、薩南十島調査と隠岐調査の写真や16ミリにはそれが如実に反映されていた。この「イトマン」へのまなざしは、以降のアチックの調査や、戦後の自身の活動にも見受けられたが、結果的には研究や報告としてまとまらなかった。

アチックの調査・研究を全体的に俯瞰した場合、敬三のポジションは、自身が持つ影響力を自覚・自省しながらも、自身の社会的立場や人脈・情報網を駆使しつつ、先駆的な資料の開示・提示法に専心し、後の報告書のための記録者という裏方のポジション（役割）であった。だが、敬三は自身の興味・関心である「意思」をアチックの「意志」へと導き、研究へとつなげていたのであり、その「意志」の一つとして「イトマン」があったのである。

【キーワード】 渋沢敬三、アチック写真、アチックフィルム、移動、出漁

## 1. はじめに

渋沢敬三（1896年～1963年。号は祭魚洞。以下、敬三）は、資料の収集や研究活動を行うアチックミュージアム（以下、アチック）を設立し、自身もそのアチックにおいて研究を行った。アチックは大正から昭和にかけて、採訪調査や資料収集といった積極的な研究活動を展開、人々の生活を知ることが目的に、民俗学・民族学的研究<sup>(1)</sup>や民具収集とそれに伴う個別研究、水産業・漁業史研究といった多様な研究を行った。このようなアチックの研究において敬三はどのようなポジション（立場、位置、関わりなど）にいたのであろうか。本論では、敬三自身の研究や調査先での視点・行動、アチックにおける敬三の影響力など、アチック刊行の彙報やノートといった報告書や収集した資料、敬三撮影の写真、16ミリフィルムの映像（以下、16ミリ）、著作などを基に、アチックの研究と敬三との関連性を考え、中でもこれまで指摘されることのなかった敬三やアチックの長期的な研究視点である「移動・出漁」、またはそれらを包括する敬三の民俗学・民族学的研究の原点の一つであった「イトマン」を事例に論述する。

## 2. アチックにおける研究の特徴

### 1) 敬三とアチックミュージアム

敬三は、当初、動物学者を志し、仙台の旧制第二高等学校農科への進学を志したが、父が廃嫡され、また、敬三に期待する祖父渋沢栄一が将来的に実業の仕事に携わって欲しいと懇願したため、大正4年（1915年）旧制第二高等学校一部英法科に進学し〔渋沢 1967：27-32〕、同年、渋沢同族会社が設立すると、その社長に就任する。大正7年（1918年）東京帝国大学法科大学入学。大学卒業後、大正10年（1921年）横浜正金銀行入行、同行ロンドン支店などに勤務、昭和元年（1926年）第一銀行へ移り、同行副頭取などを経て昭和17年（1942年）日本銀行副総裁、昭和19年（1944年）同行総裁となる。第一銀行に移ってからは、東京貯蓄銀行や渋沢倉庫、東洋生命保険株式会社など、多くの企業の要職も兼務した。大正から昭和の戦前期まで、敬三はこうした財界人としての動きの一方で民俗学や民族学、水産業・漁業史研究などに傾倒していった<sup>(2)</sup>。

大学在学時の大正7年（1918年）頃、三田綱町にある自邸の車庫の屋根裏に動植物の標本や郷土玩具などを収集した小さなミュージアム（標本室）を二高時代の同級生らとともに作る。その後、この収集活動を基盤としたアチック・ミュージアム・ソサエティという研究会的な集まりを組織。大正14年（1925年）にアチックミュージアムと名前を改称した後から、アチックの同人（研究従事者や研究協力者など）らと共に、本格的な採訪調査や民具収集・水産業・漁業史研究をはじめ（昭和17年【1942年】に日本常民文化研究所と改称〔渋沢 1954：1〕<sup>(3)</sup>）。その後、自身が日本銀行の要職を務めたために研究に対して時間が割けなくなっていったことや戦争の激化に伴うアチック同人達の応召やさまざまな統制などによってアチックの活動は縮小していった。

このようなアチック自体の研究や出版などの運営は、敬三個人の資金で運営されており、アチックの規模が拡大するとともに、多くの研究員の給与や調査研究費用、多数の刊行物出版費用などへ自身の資金が注ぎこまれた。また、敬三はこれらアチックの関係者以外の研究者にも、調査費用や出版費用などを援助しており、研究に対して費やした額は相当な額に上ったと考えられる（後述）。

## 2) アチックの研究方針、敬三の研究方針

敬三はアチックの存在理由を次のように述べている。

「アチックも数多くの方々の、協力によって標本がだんだん集るにつれて、その仕事も忙しくなってきた。(中略)物の製作者も採集者も多数であり、その協力から成り立つ此のミュージアムである以上、研究も是非チームワークにしたいと云うのが、予てからの自分望みであった。」〔渋沢 1933a : 9〕

「民具の蒐集も悪いことではない漁業史の研究も良いことだ。文献索隠他の出版も不都合なことではない。然し自分は時々思ふ。有為の若い人々にこんなに集まって頂いて而も自分自身が暗中模索の態度しか取り得なくて果たしてよいのだろうか。人を一緒にして却って一人一人の力を弱めてはいだろうか。アチックの存在はたとえ夫れ自身が獨自であるとしても而も自分の意志が多分の力を加えて居ることは否めない。之を想い、且つ之の意志が多くの人々の運命をして不当な歪さえ受けしめて居るのではなからうかと考える時慄然たらざるを得ない。然も尚おアチックの存在を是認しつつあるは何故か。何を自分はアチックに見出さんとしつつあるか。人格的に平等にして而も職業に専攻に性格に相異った人々の力が仲良き一群として働く時その総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味い度い。チームワークのハーモニアスデヴエロープメントだ。自分の待望は実に是れであった。アチックを研究所のみにしないのも、又単なる座談会のみにしないのも、又単にテクノクラシー的な効果のみを追わないのも畢竟その所以は之にある。然し振り返つてアチックの過去を追憶し眼を現在迄廻轉させた時自分としては云ひ知れぬ自己の我儘な暴逆とその責任を感じ重いかたまりが胸を打つ。たとへその思想は許されるにしても成果の上に暴露された力なきみじめさを観て。今の自分としては陶淵明の悟己往之不諫 知來者可追の句は単に口ずさむ丈では許されないのだとつくづく思ふ」〔渋沢 1935 : 1〕<sup>(4)</sup>

「論文を書くのではない。資料を学界に提供するのである。山から鉱石を掘りだし、之を選鉱して品位を高め焼いて鍍(注、かん)を取り去って粗銅とするのが本書の目的である。(中略)原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的なのである」〔渋沢 1937 : 18〕

このように敬三はアチックにおける研究について、自身の影響力と自身の態度などについての自省も交えながら、チームワークによる研究とそれに伴う総合的な研究を目指すとし、また、論文よりも資料の開示・提示を第一義とする考え方を述べている。

アチック以外の研究者に語った資料として、長野県を中心に民俗学の研究を行っていた向山雅重がアチックを訪れた際に敬三から聞き書きした『野帳』(昭和11年【1936年】6月21日付)が残されている<sup>(5)</sup>。そこには敬三のアチックの活動や諸学に関する考え方などが次のように書かれている。

「只今は項目発見時代。

資料は誰がたづねて、誰が出すか

採集家として天才でも、科学的に証明されなければいけぬ。

郷土人——比較のレンマを与へられた

郷土人がやるとよい。

— アチックは完全な資料の提供を最も大切な仕事と考へてゐる。〔向山 2013 69〕

この『野帳』においても、資料の開示・提示の必要性和それら資料に基づく「科学的」という客観的な研究・証明を目指すことを表明している。

このように敬三はアチックの活動において、第一に個人ではなくアチックという団体・組織で研究や資料整理を行うこと<sup>(6)</sup>、第二に資料の収集・整理とその開示・提示を目標として掲げている。これらは一つの事象に対して複数の視点を持つという総合的・客観的な視野に基づく姿勢、また、一つの事象に対して即断しない慎重な姿勢を示している。

### 3) アチックの調査・研究体制、資料の開示・揭示方法

前節のような敬三の考え方や姿勢は、同時にアチックの研究姿勢でもあり、アチックで行われた数々の調査・研究活動やその結果としての報告書などに集約されている。

アチックでは昭和10年(1935年)に『アチックマンスリー』(第一号は同年7月30日付より)を刊行、「斯くの如き多数の同人諸氏の研究の融和と親睦を計るを使命として発刊」(「MEMOIRE」『アチックマンスリー第八号』【昭和十一年二月二十八日】<sup>(7)</sup>)することを目的としていた。この『アチックマンスリー』の刊行には、アチックにおける活動の目標であった団体・組織で研究や整理を行うことに伴う情報共有の意味があったと考えられる。たとえば『アチックマンスリー第一号』「MEMORANDUM」からアチックの具体的な活動(研究部会)をまとめると次のようになる<sup>(8)</sup>。

- ・アチックのアシナカ研究 儀貝勇・宮本馨太郎・小川徹
- ・男鹿寒風山麓で生活記録 吉田三郎
- ・三面 村上清文
- ・文庫の内浦資料 祝宮静・藤木喜久磨・桜田勝徳・小松勝美・野沢邦夫
- ・漁業史 千葉県漁村経済の研究 山口和雄 鯨業の研究 伊豆川浅吉
- ・索隠室<sup>(9)</sup> 新潟県村上の地名 東洋学雑誌の総目録 一茶俳句集(高木一夫)<sup>(10)</sup> 人類学雑誌の総目録
- ・図書部 目録作成 高木一夫・袖山富吉・大島久雄
- ・朝鮮古文書のカード作成 張甲特

このように、昭和10年時点のアチックでは、アチック同人と呼ばれる諸氏が様々な分野・分担に分かれて調査・研究・資料整理を担当するという組織体制が確立され、研究や資料整理の分業制が図られている。『アチックマンスリー』では「MEMORANDUM(MEMO)」や「DIARY」といった項において各研究・業務の進捗が報告されており、分業体制の下、個別研究的になりがちな体制の中でも、この『アチックマンスリー』によって、研究担当者間における情報共有が行われ、「同人諸氏の研究の融和」を担ったと考えられる。

さて、上記の「MEMORANDUM」には敬三の名前がないが、敬三も銀行や各企業の重役としての仕事と並行して研究を行っている。たとえば、後述する内浦漁民史料研究の取材に対する発言(『時事新報』【昭和10年8月10日夕刊】)や、後年になるが、昭和12年(1937年)には、1月1日より、午前6時半から8時半までの出勤前の時間を研究に充て〔中山 1956: 3〕、また仕事から帰っても寸暇を見つけては、邸内にあったアチックや祭魚洞文庫へ赴き、アチック同人との話し合いや購入図書の選定、グラバー魚譜の絵に出ている魚名調査などを行い、遅いときには夜中2時3時になることも珍しくなかったという〔神奈川大学日本常民文化研究所編 2002: 272、278 渋沢 1967: 66、75〕。このように、敬三は自身の仕事と並行して研究を行っており、アチックの研

究活動における一分野を担うまでではなかったが、アチックのメンバーの一員として研究にも従事していたのである。

アチックにおけるもうひとつの目標である資料の収集・整理とその資料の開示・提示については、アチックではアチック彙報やアチックノートを刊行している。たとえば、昭和11年(1936年)調査・昭和14年(1939年)刊行の『朝鮮多島海旅行覚書』や、昭和12年調査・昭和15年(1940年)刊行の『瀬戸内海島嶼巡訪日記』など、総合的な民俗事例報告書がアチックミュージアム編で刊行されているが、これらアチック編の報告書は、調査による民俗事象の聞き書きや、図や写真を駆使して、民具、古文書、写真、16ミリなどの諸資料を刊行物に掲載した資料集・報告書という形態を執っている。そこでは、民俗事象や事例報告に徹し、研究者としての批判・解釈といったものを廃している。

このように資料の開示・提示を報告書の刊行という形態で行なうことが多かったアチックだが、アチックの行った調査や資料整理のすべてが刊行されてはいない。これら刊行されなかった調査報告や資料は、調査・資料化がまだ不十分であったものや何らかの理由で中絶したものなどと考えられるのだが<sup>(11)</sup>、この未刊行の調査報告や資料は、いずれの場合においても彙報やノートの刊行がその念頭にはあったと考えられる(後述)。

#### 4) 敬三やアチックにおける特有な調査・資料収集

写真の活用や当時としては高額な費用のかかる16ミリの活用は<sup>(12)</sup>、アチックや敬三の調査・研究における特徴の一つであり、敬三の経済的な援助・運営に基づいていたアチックの特徴の一つでもある。民俗や民族を対象とした調査において、写真を用いた例は、大正の中頃の折口信夫をはじめとして既に始まっていたが〔小川 2004: 96-102〕、16ミリを用いた例はアチックがその嚆矢であろう〔小林 2012: 300〕。この写真や16ミリの活用も資料の開示・提示の一環であった。

アチック同人である村上清文(以下、村上)は昭和11年(1936年)に東京人類学会・日本民族学会第一回総合大会で「越後三面村三面の映画」を発表・上映している。その当時を回顧して村上は「その(三面の16ミリ)フィルムを供覧に呈しました。故社会学者田辺寿利氏が、このフィルムを見て、フーンああしてしまうと報告も簡単でいいなあといわれたとかいうことを故祭魚洞先生が自分が試みさせた新しい採集の方法について大いに自得される所があったごとく私に話されたことを覚えています。」〔村上 1973: 3〕と述べており、アチックにおいて16ミリの活用を発案したのは敬三であることが分かる。

このような調査における16ミリの活用は、ロンドン時代に16ミリカメラを購入し〔小林 2012: 301-302〕、その有用性を知った上での発案だと考えられるが、このような発想は、高額な16ミリを活用できるという資金的に潤沢な環境であったアチック(敬三)ならではの特徴といえ、研究のために資金を惜しまなかった敬三のスタンスが垣間見える事例の一つといえるであろう。

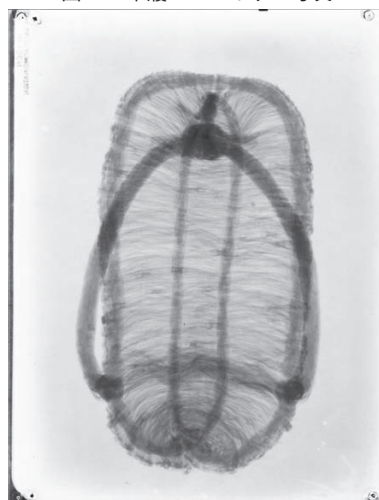
これら写真や16ミリ以外にも、敬三にしかできないとでも言うべき特徴として、敬三が持つ人脈・情報網を駆使した調査や資料収集があった。たとえば、昭和10年(1935年)10月23日~29日の「黒部、氷見、金沢」調査では、貯銀北部大会に出るかたわらで糸魚川を訪ね、当時すでに行われなくなっていた揚浜式塩田の様子を観察している。これは、揚浜式塩田での作業経験者による実演を中心とした調査で、地元の銀行の人々の協力による調査であった〔横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所 2002: 74〕。この調査の際にも関係者による写真撮影を行なわせており、敬三を含む関係者が塩田における作業の実演者を取りまいている様子がアチック写真(後述)に残されている(図1)。この糸魚川の調査以外にも、敬三は銀行の地方大会で講演や出席と並行

図1 塩田での実演を見る渋沢敬三ら一行



(昭和10年10月29日 新潟県西頸城郡糸魚川町字押上  
撮影者不明 河1-29-12-4)

図2 草履のレントゲン写真



(撮影者松尾象一 写1-22-1-2)

して調査を行うことが多く、銀行関係者による情報網をつかって民俗事象を予備調査的に調べさせ、その後、敬三自身がその当地に直接赴き実地の調査を行っている。たとえば昭和17年(1942年)7月19日～26日の日銀東北支店視察において菅江真澄墓を日銀秋田支店視察の際に見学しているが、このときの菅江真澄の墓は、日銀秋田支店員に特に探してもらったものであった〔渋沢1961a:459〕。

このような実地調査を行う理由については、調査によってそれぞれであったと考えられるが、少なくとも糸魚川の場合では、消えてしまった民俗事象である揚浜式塩田の様子を記録することになったと考えられる<sup>(13)</sup>。

また足半の調査・研究では、X線撮影という手法で足半や草履などの透過撮影を行い内部の緒の状態を調べているが(図2)、このX線撮影も、祖父栄一が創立に関わった癌研究会の理事に敬三が就任したこと(昭和4年【1929年】5月)と関係しており〔渋沢敬三伝記編纂刊行会 1981:844-845〕、『所謂足半に就いて』掲載のレントゲン撮影写真についての記述に「写真第一—四圖は癌研究会並に山川醫學博士の御好意に依り同會松尾象一氏が種々研究の上撮影せられた足半のレントゲン写真である」〔アチックミュージアム 1936b:43〕とあり、X線撮影という手法も癌研究会と関わりのあった敬三の人脈・情報網を活用した事例のひとつだといえるであろう。

このように、敬三やアチックは、第一に個人ではなくアチックという団体・組織で研究や整理を行うこと、第二に資料の収集・整理とその資料の開示・提示をすることを目標に、アチック同人による調査・研究・資料整理の分担という組織体制を確立し、16ミリの活用や敬三の人脈・情報網を利用した調査・資料収集を行い、その成果(途中段階も含む)である資料の開示・提示をアチック彙報などの報告書として刊行していたのである。

### 3. 調査における敬三の特徴やアチック内での影響力

#### 1) 敬三による撮影の特徴

では、敬三は実際の調査地においてどのような視点を持っていたのであろうか。調査に付随して残された神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研)所蔵のアチック写真や16ミリから検証していこう。

アチック写真の資料点数は約 9,000 点に及ぶが、その内、敬三の撮影と分かる写真は 177 点であり、総数における比率としては少ない（文末表 1 参照）<sup>(14)</sup>。内訳としては大正 15 年（1926 年）の「台湾、米穀大会」〔渋沢 1961a：411〕に関わる写真が 151 点とその大多数を占めている。この「台湾、米穀大会」は、敬三が第一銀行に入行する前に石黒忠篤（以下、石黒）に同行した際の写真であり、いわゆるアチック同人らと共に本格的な採訪調査を行う前の写真である。それ以外の敬三撮影の写真としては、昭和 8 年（1933 年）5 月の「越後三面」調査〔高橋 1933：42〕や、昭和 9 年（1934 年）5 月の「薩南十島」調査における写真などがある。アチック写真には撮影者不明の写真も多く存在しており、その中に敬三撮影の写真が含まれているとも考えられるが、いずれにせよアチックの調査の多くに同行した敬三にしてはその数が少ないことが特徴としてあげられるであろう。敬三撮影の写真が少ないことについては、敬三が調査においては主に 16 ミリ撮影を行っており<sup>(15)</sup>、そのため、必然的に敬三撮影の写真が少なくなったと考えられる（後述）。

さて、アチック写真における敬三撮影の写真を見ると、被写体として当地の人々が写しこまれていることが多いという特徴があげられる（表 1、図 3、4 参照）。これらの写真は、宮本馨太郎（以下、馨太郎）のように髪形や服装といったものを主題に撮影しているとは考えにくく、一見、何のために撮影されたのかその主題がわからない写真が多い<sup>(16)</sup>。たとえば、図 3、4 は人物を写すと共に画角中に造形物や民具が写されている例である。この図 3、4 は構図の中心にある造形物や民具を主として撮影したと考えられる写真であるが、その画面中にはいずれも人物が写しこまれている。この写された人物には比較対象に対する大きさの指標という意味があったとも考えられるが、注目すべきはそこに同行者ではない地元の人物が写しこまれているということであり、そこに何らかの意図があったと考えられる点である。たとえば、図 3 の場合、温陽（現在の大韓民国忠清南道）郊外のとある村にあった「天下將軍」（境界に置かれる道祖神的な造形物）を写すと共に、その天下將軍のある耕作地や道、村、住居、そこに住む人物など、さまざまな情報を写しこむことで、撮影当時の状況や風景を写した写真となっている<sup>(17)</sup>。このような撮影とは、目的とする被写体（図 3 なら「天下將軍」）に対して、それをとりまくすべてを撮影するという方法である。

事実、後年に当該写真を掲載した『犬歩当棒録』では人物の部分の部分を切って「天下將軍」のみが拡大されて使われている〔渋沢 1961a：433〕。もちろんこれは刊行物に掲載するために「余計なもの」である人物の部分の部分を切り取ったと考えられるのだが、撮影当時においては写しこんだ人物が「余計なもの」ではなくむしろ必要であり、「人物を写しこむ」という明確な意図があったと考えられる。他にも敬三が撮影した写真には地元の人物以外にも調査者を写した写真が存在し（図 5 参照）、このような人物（地元の人物や調査者）を写しこむという傾向は 16 ミリの場合でも同様である（図 6、7 参照）<sup>(18)</sup>。このような写真や 16 ミリは、資料集としての刊行物の掲載には向いておらず、結果、上記の『犬歩当棒録』のように切り取られて使われている事例の他、敬三撮影の写真がアチックの刊行物に使われている例は少ない<sup>(19)</sup>。

これら敬三撮影の写真や 16 ミリは、敬三自身の興味や関心に基づいて撮影しただけであったかもしれず、また、調査者を写した（映した）場合ならばアチック内における「楽屋落ち」のような遊びの部分も多分にあったと考えられる。しかし、被写体として当地の人々が写しこまれている（映しこまれている）ことが多いという特徴はこれだけでは説明が出来ず、何らかの意図があつて写真や 16 ミリに人物（地元の人物や調査者など）を写しこむ（映しこむ）場合もあったと考えられる（後述）。

図3 天下將軍



(昭和8年12月 朝鮮・温陽郊外 渋沢敬三撮影 写3-20-5)

図4 粃すり臼



(昭和8年12月 朝鮮・温陽郊外 渋沢敬三撮影 写3-20-3)

図5 粟島丸船上の高橋文太郎と早川孝太郎



(昭和8年5月21、24日 新潟県岩船郡粟島へ向かう船上 渋沢敬三撮影 ア-39-41)

図6 雪の残る坂道を歩く高橋文太郎、原田清、佐々木嘉一、窪田五郎、藤木喜久馬、早川孝太郎一行(右から)



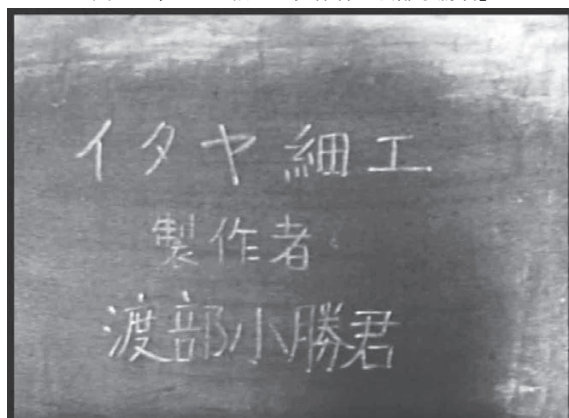
『花祭(三河北設楽郡にて)』(No.1 0:01:50)

図7 イタヤ細工製作後の渡部小勝



『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』(No.12 0:09:55)

図8 「イタヤ細工 製作者 渡部小勝君」



『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』(No.12 0:00:13)

※フィルム No. とタイム表記については、本叢書「神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルムタイトル一覧(アチック調査関連)」を参照。以下も同様。



## 2) 敬三撮影の16ミリについて

敬三が撮影したと考えられる16ミリは、他のアチックの16ミリと同様に編集が施されているのはもちろん、調査記録としてメルクマールの映像も映しこまれている。たとえば、16ミリ『男鹿、能代、藤琴、石神、八戸』(No. 11 ※フィルム No. については、本叢書「神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルムタイトル一覧 (アチック調査関連)」を参照。以下も同様。)では「脇本駅表示板」(0:01:08~0:01:20)が撮影され、16ミリ『志摩崎島』(No. 22)では「かしこじま(賢島)」の駅表示板(次の駅は「しましんめい」)(0:10:14~0:10:24)が撮影されている。これらの16ミリでは、調査地の駅表示板の撮影(「男鹿オシラサマアソビ他」)だけではなく、途中経由駅の表示板も撮影(「志摩崎島」)していることなどから、撮影時に駅表示板を調査記録として撮影することと同時に後の編集・上映も視野に入れた撮影を行っていたと考えられる。

当然、このような敬三撮影の16ミリや人物を写しこんだ写真などは、調査者や当地の人々の「記念」としての意味もあったと考えられ<sup>(20)</sup>、出典や典拠に通じる「証明」の意味合いも含まれていたと考えられる。たとえば16ミリ『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』では題名の通り渡部小勝による渋沢邸でのイタヤ細工の実演を敬三が撮影したものが〔渡部 1964:6-7〕、そこには作成者である渡部小勝が映されているのはもちろん(図7参照)、キャプションとして「イタヤ細工 製作者 渡部小勝君」とクレジットを書いた黒板も映し込まれている(図8参照<sup>(21)</sup>)。この場合、作成した人物を視覚的に見せるという「証明」にあたるわけだが、調査者の場合ならば、それはこの人物が調査をしたという証明になり、地元の人物の場合ならば、調査された人物の証明になるわけである。写真や16ミリのいずれにせよ、映像に被写体を映すことで視覚的な証明の意味を持たせるという意図があったと考えられる。

また、これら視覚的証明や前述の調査参加者の記録としての側面のほかに、上映会を意識した撮影であったということも考えられる。上映をする場合のシチュエーションとしては、まずアチックでの上映があり、次にアチック以外の学会・講演会等の上映があったと考えられる。その場合、前述した「楽屋落ち」のような遊びの部分の他に、調査に参加しなかった人(映像を視る者)の為の映像についての説明が必要となってくる。これは人物だけでなく風景や民俗事象など全般に亘るものであり、音声が入らない当時の16ミリならば尚更である。たとえば、調査者を写し込んだ映像ならば、上映時に「この調査に参加した何某先生。この調査では何々を主に調査されました。」といった、その調査者の調査した内容の説明にも利用されたと考えられ、地元の人物の場合も「この方が語ったところによると」などといった説明がされたであろうと考えられる<sup>(22)</sup>。

実際に16ミリの解説をした事例として、アチックでの上映の場合、たとえば、前述の16ミリ『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』、並びに同日内でこの『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』の後に撮影された16ミリ「足半」(渋沢史料館蔵)では「いよいよフィルムができて映写される晩、たまたま石黒忠篤先生が見えられて御用談のあと映写会にも見えられ私が御説明申上げるのに御質問などあった。〔渡部 1964:7〕と、アチックでの上映会(映写会)が開かれ<sup>(23)</sup>、製作者である渡部が解説をしている<sup>(24)</sup>。アチック以外での上映の場合では、前述の昭和11年(1936年)4月2日の東京人類学会・日本民族学会第一回総合大会における村上の「越後三面村三面の映画」発表・上映でも当然、調査者兼撮影者である村上が解説をしている。

これら16ミリは前述したアチックにおける活動の目標である資料の開示・提示の新たな方法である。つまり、『内浦漁民史料』のような資料集やその他の民俗事例報告書の刊行だけでなく、写真や16ミリの上映も資料の開示・提示の一環なのであり<sup>(25)</sup>、前述の「論文を書くのではない。資料を学界に提供するのである」の「資料」の範疇に16ミリの上映までもが含まれていたと考えら

れる。敬三はこのように新しい資料の開示・提示法である 16 ミリを、その後の編集・上映を意識した上で自ら撮影していたと考えられる。

#### 4. 調査・研究における敬三の自覚と影響力

##### 1) 敬三の研究に対する自覚

敬三は『時事新報』（昭和 10 年 8 月 10 日夕刊）の内浦漁民史料に対する新聞取材に対して次のように述べている。

「暇さへあれば史料漁りに身を細くしてゐたが、ともすれば金持の道楽だのと云はれるのが口惜しさに表向きには何も発表せず、コツコツと蒐集整理研究をしてゐた、其後は勤めの方も仕事も増したので邸内に研究所を設け相変わらずアチックミュージアムと言ひながら、助手数人を置き、帝大の土屋喬雄教授や國學院の祝教授も蔭ながらその研究振りに驚嘆して援助するほどになつた」〔株式会社時事新報社 1935〕

また、同記事内で「僕は学者でないから、議論はしない、研究の結果をこつそりと発表するだけだ、僕としては真面目な仕事の積りだ」とも述べている<sup>(26)</sup>。

この「金持の道楽だのと云はれるのが口惜しさに」という発言からも分かるように、敬三は本業多忙にもかかわらず出来る限りの時間を作り資料整理や研究を進めていた。しかし、その一方で自身の限界も自覚していたのであろう。その自覚は「僕は学者でないから、議論はしない」という発言に如実に表れている。これには謙遜もあるだろうが、それだけではなく、アチックにおいて専従して研究が出来ない自身の現状に基づいた発言でもあったと考えられる。このような姿勢は実際の研究にも表れており、敬三は『魚名集覧』のような、地道な資料整理や資料操作といったデスクワークでの研究を中心に行っていた<sup>(27)</sup>。

このような姿勢は調査地における敬三の行動にも表れており、調査地では聞き書き調査といった直接的な調査活動を行うというよりも、むしろ前章までに見てきた調査記録や新しい資料の開示・提示のための 16 ミリ撮影を主に担当していたと考えられる<sup>(28)</sup>。

##### 2) 研究における敬三の影響力

前節のように自身の研究に対する限界を自覚していた敬三が、アチックの研究に対しどのような要望をしていたのだろうか。また、その前提となるアチックの主催者である敬三の影響力とは如何なるものであったのだろうか。ここではこの影響力について確認した後に敬三の研究に対する要望や希望を見ていこう。

前述のように敬三は自省的にアチックに対する自身の影響力を理解していたが、その一方で、本人が意図する如何に関わらず、敬三にはアチックの研究における大筋の方向性を提示・決定してしまう影響力があった。それは栄一の孫であり渋沢家の当主といった敬三の境遇や複数企業の要職に就いているといった社会的地位もさることながら、前述の資金面における経済的な影響力が大きかったと考えられる。社会的な地位とも連動した資金面における影響力について、たとえば、敬三の長男である渋沢雅英（以下、雅英）は、戦前において、渋沢同族会社が同族（渋沢家やその一族）の基本的な生活費を担っていたとして「みんなそれぞれ給料をもらおうと自分で勝手に使ってよらしいとなって、敬三はそれを全部、民俗学の研究に使っていました。そうしたことができるのは基本的

な生活費を同族会が持ってくれるからです。ただ、何かをやるときには毎月集って、変なことが起らないようにしていたのだと思います。だけど、一人ひとりがどういう仕事をするとか何をするということには干渉しないので、その人の持ち分でやるなら構わないというのがそのアイデアだった。だから、制約的なものではなかったんだと敬三は話しておりました。」〔公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館 2012：17-18〕としている。アチックの運営に関わる詳細な金額は不明であるが、同族会社以外の収入として第一銀行やその他の企業における要職を兼務していたことを考えれば、相当額の資金が費やされたであろうと考えられる。このような「資金源」としての敬三の意見は当然一定の影響力があつたと考えられる。

敬三の興味に基づく調査・研究への意思は、このような経済的な影響力に連動して研究の方向性を示す「意志」へと変わっていくのであるが、その過程においてこの前段階である敬三の意思も当然ある一定の影響力となると考えられる。

敬三は日銀副総裁就任時と同じ頃（昭和17年頃）、実業史博物館創設資金を渋沢家の共同積立金（同族会社）から出させている。このことに関して雅英は「（日銀副総裁就任の承認とともに実業史博物館の創設資金を宗家の積立金から20万円支出することの質問を受けて）敬三は、私にも、あるいは娘たちにも、自分は八方美人だよとよく言ったんですよ。つまり、人を怒らせたりしないでやっているんだということを盛んに言っているんだけど、実際そういうふうにうまくやっていたと思うんです。けれども、八方美人ではないですね。自分でやろうと思ったら、バリバリやっちゃうんですよ。伝記資料（注、渋沢栄一伝記資料）だってそうでしょう。あれは相当大変な仕事ですよ。戦後の仕事でありますので、彼がどこからか集めてきたお金も随分あつたと思いますが、強引につくった。敬三の意思がなければできなかったと思うんですね。それがなければ、今の史料館（注、渋沢史料館）は仕事がないですよ。」〔公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館 2012：94-95〕と述べ、「自分でやろうと思ったら、バリバリやっちゃう」人物であつたと評している。このことは、前述の昭和10年におけるアチックの研究部会の活動に顕著であろう。たとえば、敬三自身が発見に携わった「文庫の内浦資料」のように、研究の必要と共に、敬三の興味や関心に基づいていた研究部会がある。これは敬三の「意思」からアチックの「意志」へと変わった一つの事例といえるであろう<sup>(29)</sup>。

では、このような敬三の意思に強制力があつたのかという点と次のような事例もある。馨太郎は自身の日記の中で敬三に次のように言われたとしている。

「（昭和15年）一月十五日（月）朝さくらがゆを食べる。小豆と餅を入れ塩で味をつけた、おかいである。今年の（は）例年に比して良く出来たので二杯食べる。

午後四時過ぎ、久し振りに省線で目黒経由、三田の澁澤邸へ行く。今夜は吉例の新年打ち合せ会である。澁澤先生より内浦漁民史料に見えたる民具につき今年は研究して貰ひたいと云はれる。終つて民族博物館の今後につき相談さる。」〔宮本 2005：77〕

この敬三の要望である「内浦漁民史料に見える民具の研究」だが、管見ながら馨太郎がこれを報告書や論考としてまとめた形跡は見られず、馨太郎はこの要望を受けなかったと考えられる。

また、桜田勝徳（以下、桜田）は敬三から漁船について調べてみてはどうかと提案を受けたことを「漁船調査について」の中で次のように述べている。

「何時か漁船を調べてみぬかと先生に言はれた事があつたが、明治以来和型漁船は非常な変り方をし

てしまつてみると推察し、當研究所の事業として、現在の漁村調査からどんな結果を期待し得るか全く見當もつかなかつた。それは故老の談だけでは明らかにし難い点が漁船の構造等には甚だ多い上に、舟大工の修業系統等に就ては見込の立て様も無い程、何も知つてゐぬからでもあつた」〔桜田 1938：1〕。

桜田は自身あるいはアチックの研究（事業）としては時期尚早という理由から漁船の研究に着手しなかつたとしている<sup>(30)</sup>。

このように敬三はアチック同人に対して積極的に研究の要望や希望を提案していたが、そこに強制力は無かつたといえるであろう<sup>(31)</sup>。だが、敬三の資金面における経済的な背景、渋沢家という家柄やそれに付随する地位、また敬三自身の人柄など、これら複合的な背景による影響力があつたことは否定できない。しかしそれは否定的な意味ではなく、むしろ助言や提案といったアドバイスとして肯定的に受け止められ、桜田のようにある一定の意思を持って否定しない限りその影響力が浸透する機会もあつたと想像される<sup>(32)</sup>。こうしたアチックにおける、一種、公平な関係がアチックの研究を好転・発展させ、且つ、アチックの魅力の一つとなつたのであり、敬三最晩年の「自分が一番生命としたものは、学問であつたし、このアチック・ミュージアムであつた。」という発言には、この公平な関係における研究活動ということもその一つであつただろう（後述）。

## 5. 敬三の「意思」からアチックの「意志」へ

### 1) 薩南十島調査

#### (1) 調査人員から見る学際的調査への志向という意思

前節のような敬三の「意思」がアチックの調査にどう反映しているかを確認することは難しい。しかし、薩南十島調査（以下、十島調査）とその調査に引き続き行われた隠岐調査との連続性や、その後の調査などとの関係性からは、敬三の「意思」がアチックの「意志」へと変わって行く過程が垣間見える。

十島調査は<sup>(33)</sup>、昭和9年（1934年）5月、敬三を団長に、東京帝国大学的那須皓（農政学）と宇野円空（宗教民族学）、京都帝国大学の三宅宗悦<sup>(34)</sup>（人類学・考古学、医師）、北海道帝国大学の鈴木醇（地質学。敬三とは旧制第二高校・帝大時代同級生）、大西伍一（大日本聯合青年團郷土史料陳列所）、また、アチック同人である早川孝太郎（当時は九州帝国大学農業経済研究室付。以下、早川）、高橋文太郎（以下、高橋）、宮本馨太郎（以下、馨太郎）、小川徹（以下、小川）、原田清、村上清文らのメンバーと、永井亀彦（鹿児島県立第一中学校理科教師）や永井龍一<sup>(35)</sup>（鶴嶺高女教諭。以下、永井）、文園彰村長<sup>(36)</sup>（十島村長）ら十島関係者、九州帝国大学農業経済研究室で早川を師事していた小出満二<sup>(37)</sup>（農業史・農政研究。鹿児島県高等農林学校兼務。以下、小出）や同大國史研究室研究補助員だつた桜田勝徳、同大の木村修三（農業経営学。以下、木村）、江崎悌三（昆虫学・生物学）、竹内亮（植物学・生物学）、小出が兼務していた鹿児島県高等農林学校の谷口熊之助、その他、敬三（当時子爵）の学術調査隊ということを知りつけた朝日・毎日新聞社の記者など20名以上に及ぶ参加者による調査である。

調査団の構成は、永井を中心とする調査を斡旋したメンバーと、早川・小出を中心とする九州帝大関係のメンバー、敬三を中心とするアチック関係のメンバーからなつてゐた。これらの人間関係は、同級生だつた鈴木やアチック同人といった知己の間柄ともいえるメンバー<sup>(38)</sup>と、敬三の研究に影響を与えた石黒忠篤（以下、石黒）の人的ネットワークに基づく研究者が参加しているという

特徴があげられる。石黒は、新渡戸稲造主催の「郷土会」を柳田國男らと創立させたが、その郷土会のメンバーであった那須、木村、小出がこの十島調査に参加している〔牧田 1998：440-441〕。

調査団の中でも奄美大島出身の永井は十島に関する造詣が深く、兄亀彦と共に多くの郷土資料を刊行し<sup>(39)</sup>、また、昭和5年(1930年)春から十島村航路改善の運動に尽力した〔早川 1976：196〕<sup>(40)</sup>。この尽力の結果、昭和8年(1933年)4月に十島丸が就航したことが十島調査の要因の一つになっている<sup>(41)</sup>。他にもこの調査の要因として、桜田は木村が語った「永井龍一さんの御話であるが、氏が大島々庁に勤めて居られるとき、二月頃役所の前をうろうろして居る壮丁が居るから、尋ねて見ると、十一月下旬除隊になったから郷里黒島へ帰ろうとして鹿児島から乗船したが、(海が)荒れて居た為、島の前に来て上陸出来ず、名瀬まで来て大島に上陸し、此の船の復航を待って乗船して行ったが、再び上陸できず、鹿児島に到り、又此の船の往航に乗ったが、三たび上陸出来ず、再び名瀬に来たが、旅費が尽きたから御相談に上ろうとして居た処ですとのことであった。」〔桜田 1979：875〕を挙げている。桜田によれば「上記の発表(注、木村の発表)はいづれもこの調査(注、十島調査)を終えた直後の発表であった。しかしこの事を早川から筆者が聞いたのはもっと前のことであり、もちろん敬三も早川からこの事を聞き知っており、その事が自ら団長としてこの島々を調査しようと決意する重要な一要因になったのではあるまいかと推察する。」〔桜田 1979：875〕として、十島調査の要因の一つにこの逸話があったと推定している。また、後述する馨太郎の『十島雑綴(下)』の「十島探訪隊関係新聞記事切抜」の中で鹿児島朝日新聞記者が敬三にこの調査の動機を聞いた記事では「自分の興味から、知り合ひの人々を誘つたゞけで、言はゞ豫ねて御当地の永井さん(龍一氏)からお勧めがあつたのと、十島丸が出来上つたのが縁となつて出掛けたやうな譯です」(「鹿児島朝日新聞 5月14日」宮本記念財団所蔵資料『十島雑綴(下)』)ともしている。

いずれにせよ、永井の尽力で就航した十島丸によって「文化の濁浪に穢されぬうちに一目でもよいから島の実際に触れておきたい。今度の十島探訪の動機の一つもじつにここにあった。単純な猟奇的興味などを目的に参加した者は一人だつてなかつたと思う」〔早川 1976：197〕という思惑の元、それぞれ専門領域の違う研究者による調査が行われたのであり、複数の学問領域からなる学際的且つ複数人員による調査を目指したという敬三の意思が実現化した調査であったと考えられる。

## (2) 資料の開示・揭示という意思 — 報告書作成への過程 —

さて、この十島調査は、調査を実行する各島々へ事前に通知された調査であり、調査に関する事前報告が島側からアチックにもたらされていた。流通経済大学所蔵祭魚洞文庫<sup>(42)</sup>には目録上『櫻島噴火記』とする未製本の冊子等のまとめり(16点からなる資料群)が収められている(流通経済大学所蔵祭魚洞文庫：『櫻島噴火記』請求記号291.97-5)<sup>(43)</sup>。この資料には作成年月日が記載されているものがあり、『中之島を語る』と書かれた謄写版印刷による冊子の表紙には「昭和九年五月十五日、澁澤子東京御一行ヲ迎ヘルニ當リ、」また『忘れ勝の小宝島 昭和九年度』と書かれた謄写版印刷による冊子の末文には「島小なる為忘れ勝の際今や將に光榮とする澁澤子爵御一行を迎へんとす」とある。このように『櫻島噴火記』の資料群は十島調査を行うにあたって出された事前報告で、調査のために準備された報告書のほか、調査以前に作成された既存の冊子(『硫黄島要覧』や『本校ノ農業教育』など)を流用した資料からなっている。この事前報告は敬三だけでなく、調査参加者、少なくともアチック関係者の元には届いていたと考えられる。たとえば、メンバーであった馨太郎はこの事前報告を上下二冊にまとめ製本している(宮本記念財団所蔵資料『十島雑綴(上)』、『十島雑綴(下)』)<sup>(44)</sup>。これら事前報告の内容は、地勢や気候、行政区域の変遷、島別人口といった行政的な性格の報告や、伝説集、年中行事、教育史、祝詞集など、内容が多岐に亘っており、調査

団側から十島側に対して、学際的な調査になることを想定（前提）し且つ、調査後の報告書作成も想定した要望がそこにはあったと考えられる。

さて、馨太郎の『十島雜綴（下）』には「附録」として奄美大島の報告や「十島探訪隊関係新聞記事切抜」が付されている。これは調査後の新聞記事の切り抜きを馨太郎がまとめたものであるが、その中に、敬三が十島調査から隠岐調査（後述）へ向かう列車にて、筑後新聞の記者に語った調査の感想・後日談が掲載されている。

「一行は二十二名でその中には東大、京大、東北（注、ママ）、帝大、九州帝大から夫々専門の博士、學者が八名も加はり、その他何れも特殊的研究的趣味を有つものばかりであつた

若しこれが政府あたりの主催であれば各大學の教授によつて却々意見が合はぬものだが今回は幸ひ極めて圓滿に行つたのは嬉しかつた

今回の南嶋探訪は自然科学、精神科学兩方面から十嶋の民族、産業、地質、氣候風土、動植物その他各般に亘りて調査研究したものであるが十嶋は南帯の北限帯と温帯の南限帯とがクロスするところだけに學術的に研究的興味が見出されること少く各學者とも収穫するところ多くなかつたので何れこれ等は具さに學術的研究工作が行はれた上發表されるであらうと思ふ

鹿児島における講演では單にその輪廓的概念が發表されたに過ぎない十嶋々民は世の文化からは遠ざかり自然力には脅かされ非當に虐げられた生活を送つてゐるにも拘らず土地に對する愛着の念は極めて強く他に移住を勧められても決してこれに應ぜず依然この虐げられたる生活に甘んじてゐる従つて物に對する保存力の強大なることは驚くばかりであつて今回の探訪に際しても各種考古的資料を見出し明治初年第一銀行發行の一圓紙幣も見出し得難い珍寶として譲り受けて貰つた、その他考古的逸品も買取れば買取り得ぬこともなかつたが内地にこれを持歸りて値が出た場合嶋民に後悔せしむるのは面白くないと思うてこれ等は一切持つて來なかつた

嶋民は平家の子孫だと自任し現にその名なども善治とか義行とか称するが如く普通の農村には見られぬ名が多く又安德天皇の御墓所と傳へられるものもあり而してこれに對しては流石に學者連中も裁断を下すことを憚つたが嶋民はこれを遺憾としたやうであつた

嶋民の大部分は農業であつて主食物は甘藷であり一部漁業にも従事してゐるが何しろ交通不便の地とて時によつては二ヶ月間も船が出ない状態だからその消化に困り従つて鹽藏、冷蔵設備が完成せぬ限り漁業にも勿論大した期待をかけることは出来ない

全嶋を通じて僅かに医者か一人しかゐないのだからその文化の程度が窺はれその虐げられたる生活には洵に同情の念に堪へないが四圍の情勢は勿論未だ資料的投資なども許さない要するに内地国民としては最後に残されたる一人として南嶋十嶋民あることを念頭において進むことが肝要であることを痛切に感じた」

（「筑後新聞 5月22日」<sup>(45)</sup>宮本記念財団『十島雜綴（下）』）

ここでの敬三は、「文化の濁浪に穢され」ていない事例として「明治初年第一銀行發行の一圓紙幣」の話を取りあげている。自身が第一銀行の取締役であつたことからの発言だとも考えられるが、新聞の記事ということもあつて一般受けのする事例としてあげたのであろう。このようにメディア向けの答えをする一方で、「四圍の情勢は勿論未だ資料的投資なども許さない要するに内地国民としては最後に残されたる一人として南嶋十嶋民あることを念頭において進むことが肝要であることを痛切に感じた」として、前述の永井の逸話と同状況を目にした感想も述べている。

十島調査は時間的制約もありおよそ本格的な調査ではなく、当初から予備調査として計画されて

いたと考えられる。上記の「筑後新聞」でも「今回の南嶋探訪」「今回の探訪に際して」と表現して次回を示唆した発言があることや、「鹿児島朝日新聞 5月14日」にも

「斯くて澁澤子を中心として一行の各氏は

各島僅か三四時間位の滞在で詳細の調査が出来るものでない最も動物や植物殊に渡り鳥や昆蟲などに就ては同地が亜熱帯と温帯との境界となつて居るので面白いものが見出せるかも知れないが要するに世間が大きな期待を持ち過ぎるとすれば、それは私共の大きな迷惑である、此の次に再びお出でになる人達の足がかりを作れば良いのだ

と言つたやうなことが断片的に語られた」

(「鹿児島朝日新聞 5月14日」宮本記念財団『十島雜綴(下)』)<sup>(46)</sup>

とあって、調査団各員も予備調査的性格の調査であることを自覚していることがわかる。

このように十島調査とは、域内の複数地域を対象として将来的に継続する長期的な調査を目指していた。十島調査の補完的調査としては、九州帝大側では、早川が同年10月に黒島、翌10年6月悪石島、アチック関係者側では、宮本常一・桜田が15年(1940年)5月に宝島をそれぞれ調査している〔早川 2003:386、桜田 1982:565〕<sup>(47)</sup>。

また、桜田が「これは誠に駆足の旅行で、それでも敬三は参加者の見聞記や写真を一冊にまとめて、記念にしようと希望していたが、遂にその実現は見なかった。」〔桜田 1979:878〕と述べているように、調査報告書の刊行を予定した調査でもあり、他方、小出・早川を中心とした九州帝大のメンバーによってその後の調査を継続する計画もあった。早川「薩南十島を探る」の小出による序文には「本章は「十島小記」と題し多く早川君の執筆に基づいておるが、桜田勝徳氏の手になるものもあり、写真は同行の木村、江崎両教授、竹内亮氏が撮られたのも借用した。(小出満二記す)」〔早川 1976:195〕とあり、これを所収する『早川孝太郎全集 第九巻 島の民俗』編集注に「この紀行文はノートの形で残っていたもので、そこに写真は付されていなかった。」〔早川 1976:195〕ともある。この「十島小記」と題したノートは、紀行文という形式で未完ではあるが報告書の素案を呈しており、小出・早川を中心とした九州帝大関係者を中心に十島調査の報告書を作ろうとしていたことがわかるであろう。

これらのことから十島調査は、九州帝大を中心にアチックも関わる形で、報告書作成や調査の継続などを検討していたが、その後、引き続いて行われるはずの調査や薩南十島全体に及ぶような報告書作成は、九州帝大関係者やアチックのいずれにおいても行われなかった。後年、その理由を敬三は「各種の資料が写真やスケッチとともに集ったが、まとめる時期が既に支那事変に入ったため支障を来し遂に公刊の機を失したのはいまもって残念である。それでもその一行に『朝日』と『毎日』両紙が一人ずつ記者を特派され、かなり長い記事を当時連載され孤島苦に悩む人々の気持を世に紹介されたのはせめてもの慰めであった。」〔渋沢 1993a:251〕としている。一見、戦時下における状況によって公刊されなかったかのように書かれているが、この十島調査が行われた昭和9年以降でも、アチックにおける調査報告書は刊行されておりこの発言には矛盾がある。この文は昭和28年(1953年)5月20日付の『朝日新聞』に掲載されたもので(昭和28年5月16日記)、新聞向けの内容として考慮しなければならないのだが、おそらく、事実としてはアチックの報告書のように、アチック単独としての公刊は可能であっても、戦時下における九州帝大関係者を中心としたアチックを超えたネットワークによる共同執筆は難しかったためにまとめられなかったと考えられる<sup>(48)</sup>。

いずれにせよ、十島調査は、「文化の濁浪に穢されぬうちに一目でもよいから島の実際に触れておきたい」という目的の下に、敬三を中心とした人間関係に基づくという限定的なメンバーによる、学際的且つ複数人員による予備調査的な性格の調査であった。また、十島における実地調査や島側からの事前報告、後に行われるはずだった調査も含めたトータルな報告書作成を目指す調査でもあった。この複数人員による調査団の構成という意味は、個人ではなく団体・組織で研究や整理を行うというアチックの目標に、また報告書作成は資料の開示・提示というもう一つのアチックの目標にそれぞれ準じており、敬三の意思が強く反映している調査であったといえるであろう。

## 2) 「イトマン」研究という敬三の意思

### (1) 民俗学・民族学に対する興味の萌芽時代

十島調査には前節のような経緯があったのだが、この十島調査や引き続き行われた隠岐調査などには、複数人員による調査や報告書作成といった敬三の意思の他に、もう一つの意味があったと考えられる。そのもう一つの意味とは概念としての「イトマン」を調査・研究することであった。この場合の「イトマン」とは、文字通りの糸満だけではなく、むしろイトマンとして括られる人々(必ずしも糸満出身の人だけに限らない)や、漁民、船、あるいはこれらの移動・出漁などを指す概念であり(以下、「イトマン」)、転じて、移動・出漁する人々にまで繋がる概念である。

敬三は、自身が民俗学・民族学的研究を志す当初から、この「イトマン」に対する興味を抱いていた<sup>(49)</sup>。敬三はその頃のことを石黒や柳田國男との関係を回顧して次のように述べている。

「大正二年ごろに柳田さんに会った(注、ママ)<sup>(50)</sup>。柳田さんは学問として会ったのじゃない。あの親類に矢田部というのがいる。私の親友に矢田部勁吉という音楽家がいる。これが柳田さんの奥さんの甥なんです。そんな関係で柳田さんの所へ行っておった。だから僕は柳田先生と言った記憶がない。師弟の関係じゃない。親友の関係で入っちゃった。そのうちに民俗学のことをちょっと面白いと思いついて、そんなものを携えて行ったのが、大正四年、石黒さんと一緒に上ったことがある。その時分に柳田さんが中心で甲寅叢書が出たが大変面白く思ったりして、そういう意味で学問の点で最初に接触した。その時に糸満の船が金華山まで来ておることをちょっと話されたのに、非常に興味を持った。それからだんだんそっちの方に注意が行くようになった。」〔日本銀行調査局 1974:295〕

また、「南島見聞録」でも「大正七八年の頃ほひだつたと思ふ(注、ママ)。柳田國男さんから糸満人の話を伺った時、彼等が小さな刳舟に乗つて、鹿児島は勿論時とすると土佐、紀州を経て最北金華山沖まで北上したことがあるのを知つて、非常に驚いたと同時に、民族移動が海上必しも陸上に比して稀ならざるに非ずやと云ふ暗示を得て、興味深く覚えたことがある。」〔洪沢 1933b:126〕とあり、二高入学の前後の頃に柳田から話を聞いたことで敬三が「イトマン」について興味を持ったことがわかる。これは「イトマン」についての興味もさることながら、敬三自身が二校時代に過ごした仙台の近く、牡鹿半島先の金華山まで「イトマン」が来ていたということも関係しているであろう。

その後、大正15年(1926年)4月、敬三は台湾で開かれた大日本米穀大会に参加する石黒に同行し、その帰り道に石黒らとともに寄った石垣島で「イトマン」によるタターチャ漁を見ている(5月4日)。その様子を敬三は「我々一行を乗せた発動機船が萬年青岳を右に見て名蔵の湾に入ると、遙か前方に六十六艘からなる糸満の刳舟が環状をなして浮び、四百餘人の糸満人が、手に手に或は櫂で或は棒で海を打ちたゞき大声をあげて、魚を環の中心へ追ひつゝ、徐々求心的に進んで居



図9 石垣島 タターチャ漁



(大正15年5月4日 石垣島四箇沖合 渋沢敬三撮影 ア-119-7-1-2)

図10 糸満のへぎ舟



(大正15年5月4日 石垣島四箇沖合 渋沢敬三撮影 ア-119-5-2)

図11 タターチャ漁



(大正15年5月4日 石垣島四箇沖合 渋沢敬三撮影 ア-119-7-2-2)

図12 中之島の糸満人の舟、サバニイの舳



(昭和9年5月15日 中之島 桜田勝徳撮影 ア-10-102)

図13 奄美大島名瀬町の糸満女性



奄美大島 名瀬町にて、糸満女 (櫻田勝徳作)

(昭和9年5月17日 奄美大島名瀬町 桜田勝徳撮影 ア-12-46)

図14 中之島の大亀



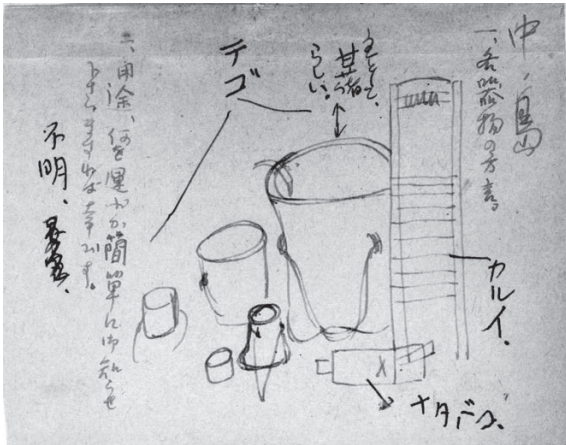
(昭和9年5月15日 中之島 谷口熊之助撮影 ア-10-68)

図 15 中之島のカルイとテゴ類



(昭和9年5月15日 中之島 高橋文太郎撮影 ア-10-105)

図 16 中之島のカルイとテゴ類 付紙



(昭和9年5月15日 中之島 ア-10-105a)

る。海面を打ちたゝきつゝ魚を追ふが故にこの漁撈を「タターチャ」と呼ぶのである。〔渋沢 1933b : 105〕とし、また、使われている刳舟についても「この糸満の刳舟は糸満特有の独木船で、舟子は前方を向き並んで膝をつきながら手で櫂を漕ぐので、ボートに比べ一際能率が悪いやうに見受けるが、それにも拘らず舟の構造が水に対する抵抗を極めて軽微にしてある為か、六人位で全力で注ぐと、五湮位の速力が優に出るのには真に一驚を喫した。現に彼等は我々の発動機船を楽々と追ひ超すのである。〔渋沢 1933b : 105-106〕と観察に基づいた報告をしており、この様子を写真にも収めている(図9、10、11参照)。因みに同行中の5月5日には直接糸満町にも寄っており、ここでは、出漁中であつたためか漁村ではなく、黒糖製造の様子を見学している。

(2) 資料や追跡調査から見る十島調査における「イトマン」

前節の十島調査においても、調査団の一行は、期せずして中之島や小宝島、奄美大島名瀬町で「イトマン」の船や家、頭上運搬をする女性、亀を獲りに出漁して来た「イトマン」などに出会っている(図12、13、14参照)。そこで

は、ア-10-68(図14参照)の写真台紙に「中之島 大亀 糸満が捕え大島へ運搬するもの。島人は卵は採るも親を捕えざる習慣なり」とあるように、若干の調査も行っている。

この十島調査における「イトマン」について、論者が関わった平成23年(2011年)より行った追跡調査やアチック写真、16ミリなどを基にその詳細を見てみよう。

2011年3月19日、国際常民文化研究機構の共同研究「アチックフィルム・写真に見るモノ・身体・表象」班(以下、高城班)における中之島調査では、島の方々70名ほどに集ってもらい十島村役場中之島出張所(コミュニティセンター)にて、アチックにおける十島調査での写真や動画を、高城班の高城玲や同班小島摩文が説明・質問する形で上映した(以下、上映会)。この上映会にてア-10-105(図15参照)の上映時に、会場から「(ア-10-105左から)昼飯テゴ、テゴ、アマミテゴ(魚のエサを入れる)、テル(奄美大島から来たという)、カルイ(カイイとも)」との発言があった。因みに、このアチック写真であるア-10-105には付紙が貼付されており(図16参照)、その付紙には「中ノ島 一、各器物の方言。カルイ、ナタバコ、テゴ 主として甘藷らしい。二、用途、何を運ぶか簡単に御知らせ下さいませすれば幸いです。不明<□□>」とある。この付紙には上記の現地上映会における発言の「テル」についての名称記載が無く、「テゴ」として一括され「主として甘藷らしい。」とされている。おそらく、ア-10-105撮影時においてテルとは聞けなかったであろう<sup>(51)</sup>。後述する聞き書き調査ではテル以外にもオオシマテゴやアマミテゴなどといった呼称も確認されたことから、ア-10-105が撮影された時点において民具の呼称の聞き洩らしがあった可

能性が考えられる。ともかく、注目すべきはこの「テル」が奄美大島から来たモノとされていることである。

平成 24 年（2012 年）3 月 26 日～29 日における高城班の中之島調査では、「イトマン」にまつわる出漁やそれに付随する事項、十島調査の頃から現在に至るまでの島内における「イトマン」に対する認識が垣間見えた。以下、その時の聞き書き調査における発言を並べると以下ようになる。

- ・HM 氏（大正 14 年【1925 年】生れ 高尾出身）「（中之島には）亀の缶詰工場があった。（中之島の）ニシもヒガシも（亀を）食べた。今は亀は捕ってはいけいなので食べない。」
- ・HN 氏（昭和 11 年【1936 年】生れ ニシ出身）「子供の頃にはヒガシとニシで話が違った（言葉が通じなかった）。」「学校の近くに（亀の）缶詰工場があった。」
- ・AK 氏（昭和 14 年【1939 年】生れ ニシ出身）「亀は見たけど食べたことはない。」「丸木舟は（かつて）見た。島で作っていた人がいた。昔の人。ヒガシの方はイチョマンが住んでいて（奄美）大島から入り込んできた人。サバニを使っていた。」「（テル【テゴ】が写る写真ア-10-105 を見て）これはニシのテゴ。これはヒガシのテゴ。寸胴なのがニシでくびれがあるのがヒガシの。見ただけで分かる。（くびれたテゴは）大島の。」
- ・SK 氏（昭和 20 年【1945 年】生れ ニシ出身）「イトマン船は丸木舟、ダンベとっていた。」「（テル【テゴ】が写る写真ア-10-105 を見て）大島テゴ（くびれがあるテゴ写真中央）、テゴ、カルイ。アマミテゴは蓋付きでえさ入れに使った。ニシはテゴを背負って、ヒガシは頭で負う。」「今でもニシとヒガシで言葉が通じないことがある。」
- ・NM 氏（昭和 11 年【1936 年】生れ ニシ出身）「亀は食べる人は捕っていた。昔、ヒガシでは 5 月 15 日に舟で競争をやっていた。イトマン船 6、7 隻でやっていた。」「カルイは竹木でつくる。イシダイのえさを入れるのにアマミ（アマミテゴ）を使った。」

（平成 24 年【2012 年】3 月 27 日～28 日調査）

中之島では大きく分けてニシとヒガシに集落が分かれるが、このニシとは、中之島開闢の伝承として中之島に住み着きはじめたとされる人々が形成した集落の単位であり、ヒガシとは、ニシによるムラ形成後に、形成されたとされる比較的あたらしい集落を指している。これらは島の西と東という地勢上の位置関係から名付けられたもので、このヒガシに「イトマン」（中之島ではイチョマンと言う）が住み着き、集落を形成したとされる。また、この「イトマン（イチョマン）」は沖縄県糸満を直接指す言葉ではなく、中之島では奄美大島から移住した人々を指す総称として使われている。これには、中之島以南からの移住者という意味合いがあり、前述のテルのように、モノの場合に奄美大島を一つの基準（南方向のステレオタイプ）とした認識があったのと同様に、ヒトの場合、移住者出身の地名（奄美大島）を呼称に使うのではなく「イトマン」としているところに特徴があり、移住や出漁といった、移動してきた人の代名詞として「イトマン」が通用している。

この聞き書き調査では上映会のような「テル」という言葉は出てこなかったが、「ヒガシのテゴ」「大島テゴ」「アマミテゴ」といった呼称を用いてカゴ（籠）を区別していることが分かる。おそらく、十島調査では、直接これらの語彙を聞いていなかったにしろ、ア-10-68 の写真台紙「中之島大亀 糸満が捕え大島へ運搬するもの。島人は卵は採るも親を捕えざる習慣なり」などとあるように、調査者各自が「イトマン」の存在を認識していた可能性が考えられる。

（3）敬三はなぜ、当地の人を写したか —アチック写真や 16 ミリに見える「イトマン」—

ここまで見てきた「イトマン」をキーワードにすることで、前述した敬三が被写体として当地の人々をなぜ写しこんだのかが分かる事例が、十島調査におけるアチック写真と 16 ミリの双方に存在する。

図 17 徳丸コウリョウ氏邸の庭とテーブル



【十嶋鴻爪】(No.9 0:27:17)

図 18 小出満二と共に映る徳丸コウリョウ氏



【十嶋鴻爪】(No.9 0:27:23)

十島調査の 16 ミリにおける中之島の場面では、島の芸能の会場となる小学校（運動）の映像に続き、敬三を含んだ調査団の一行がヒガシの集落へと向かう映像がある。この時、ヒガシへと向かったのは調査団員全てではない。たとえば、ア-10-105 撮影の高橋と同行していた小川は「このフィルムでは宮本さんも私らも上船・下船、それに記念撮影の場を除いて写っていない。共同調査といっても、上陸すれば宮本さんは服飾、私は高橋文太郎さんの助手であったから、終始いっしょというわけでもなかった。」〔小川 1979〕と述べており、事実、16 ミリではヒガシへと向かった一行の中に高橋・小川の姿は確認できない。

また、敬三も調査団の様子としては次のように述べている。

「海辺の岩間に清澄な海水がたたえられた底にはエラブウナギがじっと横たわっている辺で江崎さんは海のアメンボ採集に余念なく、三宅さんは村人の指掌紋を克明に採印しておられた。サンゴ礁片で無造作にかこってあり、中の棺がすき見出きる地上の墓や社殿

のない極めて原始型に見える神域等は宇野さんや民族学者の注目の的であった。（中略）染料に用いる紅花を見たり、古い型の着物を頂いたり（これは保谷村の民族学協会博物館に保存されている）、年中行事や祭葬または家族構成や日常生活の調査に常民文化研究所の連中はなかなか忙しい。那須さんはじめ農学方面の方々は島の農業実態把握に努力され、更に漁業慣行や技術にも注意が向けられた。」〔渋沢 1993a 250〕

このように十島調査では調査団員が各自の興味において分かれて調査を行っている<sup>(52)</sup>。

では、敬三ら一行は何を求めてヒガシへと向かったのか。敬三ら一行は、ヒガシと思われる地で、とある民家を訪れている。民家の庭にテーブルクロスのかかったテーブルが用意されたカット（図 17）の後、その家主と思われる人物と団員の小出が映されている（図 18）。この人物は、徳丸コウリョウ氏という人物で、庭のテーブルも徳丸氏が敬三ら一行をもてなすために用意したと考えられる。

このように敬三ら一行は徳丸氏に会うためにヒガシへと向かったのであるが、この徳丸氏は、中之島のヒガシにおいて奄美大島から中之島に住み着いた「初めての人」とされている人物で<sup>(53)</sup>、徳丸氏は中之島内におけるいわゆる「イトマン」であった。つまり、一行の中心と考えられる敬三の意思である「イトマン」に会うという意味がこの場面に関係していると考えられる。

この徳丸邸における映像では、民家や庭、そこに立つ小出と徳丸氏というズームアウトしたカット（図 17）と小出と徳丸氏が映るズームインしたカット（図 18）の 2 カットの映像、いわゆる

「引き」と「寄り」の2カットを使って撮影され、16ミリ全体の編集においてもその両方のカットが使われていることから、徳丸邸における映像の重要性が考えられる。しかし、この徳丸邸における一連の映像にはキャプションによる説明がなく、その詳細についてはこれまで不明であった。おそらく、16ミリ編集時において、16ミリ全体の構成を考えたときに、調査としての記録や成果としては適当ではなく、特段キャプションを入れるまでの内容ではないと判断したためだと考えられる。いずれにせよ、この徳丸邸での映像には、敬三の「イトマン」に対する興味という意味が垣間見えているのである。

中之島以外では、敬三が撮影したアチック写真の中で、薩南十島調査に関する小宝島の写真の女性(図19)などがなぜ撮影されたのかも、この「イトマン」との関係が考えられる。16ミリの0:39:25~0:39:28にあたるキャプション「イサと糸満女」の後、イサ(赤子用の揺り籠のようなもの。天井から吊り下げられている)、笠と棕櫚の葉で出来た蓑を身に着ける男性、イサを揺らす女性などのカット後、0:40:23~0:40:42にかけて小宝島の写真の女性が登場する(上半身。主に髪型を撮る)。

この女性が「糸満女」(図20)であり、図19の女性である。このことは、16ミリを撮影していた敬三がわざわざ写真(スチールカメラ)でも撮影しているということであって、この「糸満女」(小宝島の女性)がそれだけ重要であったということであろう。

徳丸氏の場合、厳密に言えば糸満の人ではなく、中之島の民俗語彙として言われる「イトマン」であって、この語彙の意味を十島調査員がどこまで把握していたのかは不明であるが、短い滞在時間における調査ということや、民具班の場合ではあるが、前述のテルという奄美大島からきたとされる籠の名前を知らなかったということなどから、「イトマン」という語彙の把握も不完全であったと考えられる。小宝島の女性の場合、もちろん、前述のように記念撮影としての記録という意味もあったと考えられるが、16ミリにおいてわざわざ「イサと糸満女」とキャプションを入れた編集をしていることから、「イトマン」を撮影するという調査上の必然性がそこにあったと考えられる<sup>(54)</sup>。

いずれにせよ、これらの撮影の背景には「イトマン」という共通した意味があり、とりわけ敬三が16ミリで撮影していること(中之島)や、16ミリと写真の両方でわざわざ撮影していること(小宝島)には、記念撮影以上の特別な意味があったと考えられる。

十島調査の後、その足ですぐに隠岐調査に向かったのも、この調査中に糸満の人々が隠岐まで出漁するというを知り、「イトマン」の出漁範囲やその出漁先での漁法の確認などが理由であっ

図19 小宝島の島民の記念写真



(昭和9年5月16日 鹿児島県小宝島 渋沢敬三撮影 ア-11-81)

図20 ア11-81に写る女性



【十嶋鴻爪】(No.9 0:40:25)

たとえられる（後述）。因みに十島調査のような相当数の人員が揃う調査では必ずその足で次の調査を行なっている。これはそれだけの人数が揃う機会があまりないという希少性に基づいていたと考えられ、また、十島調査のように第一の調査で発見・着想を得た事柄を次の第二の調査で調べようという場合もあったと考えられる<sup>(55)</sup>。これら調査団の行動は敬三の意思が如実に反映しており、薩南十島と隠岐調査の場合はその具体的な表れが研究対象としての「イトマン」だったと考えられる。

#### （４）薩南十島調査以降のイトマン・移動・出漁に対する調査や研究

さて、アチックでは十島調査の後、その足ですぐに隠岐調査（５月２２日～２９日。第一次隠岐調査）に向かい、さらにその翌年の昭和１０年（１９３５年）８月にも改めて隠岐での調査（第二次隠岐調査）が行われる。この第二次隠岐調査は桜田、山口和雄（以下、山口）、岩倉市郎によって行なわれたが、山口は「これ（隠岐調査）は渋沢先生のほうから言われました。隠岐島に沖縄の糸満の漁夫が大きな漁業家に雇われて来ているから、わざわざ沖縄まで行かなくても、あそこで糸満の漁業を見る事ができる、それから隠岐島には焼畑もあるから調査をしたらいいというのは前から考えておられたわけです。」〔河岡ほか １９８６：３３３〕として隠岐調査についての経緯を述べ、調査目標の中心として「イトマン」の漁業を挙げている<sup>(56)</sup>。十島調査の後、その足ですぐに隠岐調査に向かった理由もこの「イトマン」の出漁に関することが理由であったのだろう。

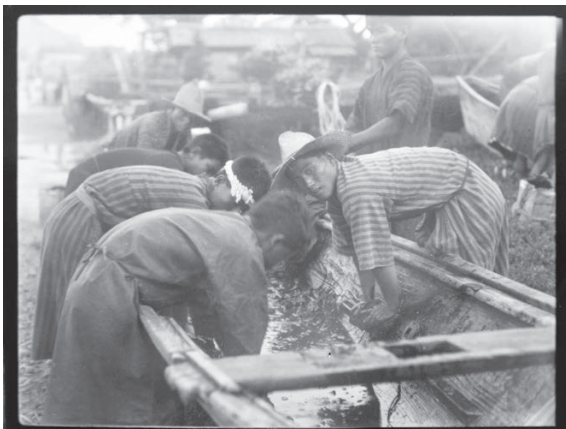
昭和１０年８月、第二次隠岐調査での「イトマン」とは、糸満の大城カメを中心とする２１、２歳を年長とする３２人の青少年らによる出漁であり、またこの出漁は隠岐の漁業家安達和太郎による漁業経営の一環であった（図２１）。この大城ら一団（組）は、毎年旧正月に組を作り、旧九月に帰郷し組を解散する。昭和１０年にあつては旧正月に組を組織、２４日には高知県沖島、さらに母島や深浦で漁撈をし、５月はじめから８月末まで隠岐にて漁撈を行い、再び沖島に引き返して漁を行い、旧九月中旬過ぎに沖縄に戻るというスケジュールであった〔桜田 １９３５：６〕。大城ら一団（組）は隠岐ではマワシタカミ漁（まわしたか網漁）という追い込み漁を行い、イサキ、タイ、ハス（イシダイの地方名）、クロイヲ（メジナ。隠岐周辺ではクロウオ。沖縄やトカラ列島ではウオ【魚】をイオやイクという）などを獲ったという（図２２）。

この第二次隠岐調査でも１６ミリが残されている。渋沢史料館所蔵の「渋沢敬三関係フィルム」には『糸満（海上）』（no. 39）、『隠岐Ⅰ』（no. 40）、『隠岐Ⅱ』（no. 41）、『隠岐Ⅳ』（no. 42）、『漁業』（no. 56）とあり、これらのいずれもが第二次隠岐調査の動画であつて、『隠岐Ⅰ』（no. 40）以外が

糸満の出漁（マワシタカミ漁）について映された資料である（『隠岐Ⅰ』（no. 40）は潜水服を付けた潜水漁法が中心）。河岡は「桜田は十六ミリの撮影機を携行し、糸満漁業の実況をフィルムにおさめている」〔河岡 １９７３：２〕としており、この桜田が撮影した１６ミリとはこれらの第二次隠岐調査の１６ミリをさしていると考えられる。

また、この昭和１０年の第二次隠岐調査の足で桜田と山口は、広島県安芸郡三津と、愛媛県大三島へも調査に出かけている。この報告は『美保関・広島三津・伊予大三島 漁村探訪記』としてまとめられている〔桜田、山口

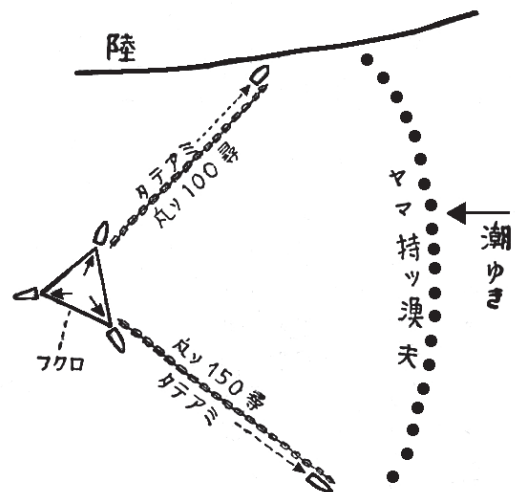
図 21 アカギンを着た漁師による網染め



（昭和 10 年 8 月 12 日～18 日 島根県隠岐郡西ノ島町船越 撮影者不明 写 3-5-13）

1936)。『美保関・広島三津・伊予大三島 漁村採訪記』は、昭和10年8月の隠岐調査前の境港・美保関(10、11日)、調査後の広島県安芸郡三津(23、24日)、愛媛県大三島(24日)の調査をまとめた報告書で、各地での調査は短時間であったため統一的なテーマで調査されたわけではないが、内容は漁法や漁業経営を中心とした報告書となっている。特に大三島ノウジ集落では移住漁民の集落の盛況だった頃と現在の様子が記録されている。当初の予定では『アチックマンズリー 第二号』「MEMORANDUM」(1935年11月)に隠岐から広島県安芸三津とまわりその後「同県竹原に立ち寄った上で今月末帰京される筈である。」(『アチックマンズリー

図22 隠岐におけるマワシタカミ漁図



〔桜田 1935: 9〕(一部改訂)

第二号』「MEMORANDUM」3)とあるように、隠岐(糸満)、能地(現三原市幸崎町)、竹原(現竹原市二窓)と、専門漁民であり且つ移住漁民の代表的な集落をこの機会に回ろうという計画があったと考えられる。しかし、能地は三原市の能地ではなく、なぜか大三島のノウジ集落で調査を行っただけで竹原には回っていない。なぜこのような経緯になったのかは不明であるが、いずれにせよ専門的漁民で移住漁民の代表的な集落の調査として瀬戸内海における専門的漁民の集落が選ばれている所に、調査の軸として移動・出漁というキーワードがあったといえるであろう。

「イトマン」やその移動・出漁について敬三が記したものでは、昭和11年(1936年)4月に記した「日本民族と漁業」に「我が国漁民の内に水上漂民のあることは見逃し得ない。琉球の糸満、大分県のシャー、長崎県のエブネ、三重県または済州島の海女の如きはその例で、小舟を以て想像以上遠方に出稼をする。糸満が刳舟に乗り仙台金華山沖に現われた例の如き、その可能性は我が国上代文化へ何物かの暗示を与えている。」〔渋沢 1993b: 212〕とあり、ここでも「イトマン」やその移動・出漁を例に、糸満の出漁範囲として仙台金華山を例にあげている。また、「仏島について」(昭和15年4月28日記)<sup>(57)</sup>では「水葬の問題」として「人や物の輸送に従事した廻船も問題になるが、それにも増して沖縄の糸満人や長崎の家舟、豊後のシャーの如き小舟に乗って沿岸を漁しつつ時に想像以上遠方まで出漁する漁民団の水上生活を考えてみる。」〔渋沢 1993c: 231〕として「イトマン」やその移動・出漁を例にあげながら全国にある仏島の名称に絡めて水葬の問題として考察している。

#### (5) その後のイトマン・移動・出漁研究

その後、アチック関係者における出漁や移住・移動する漁民の研究は、桜田が柳田國男主導の海村調査(昭和12年~14年)の報告書『海村生活の研究』に「出漁者と漁業移住」〔桜田 1949〕としてまとめ、地先沿岸漁業と出漁漁民の関係性から農村との交渉関係を考え、また同書内で出漁者と移住者に視点を置く漁村調査の必要性を説いている。また、河岡武春も「黒潮の海人」〔河岡 1987〕や「漂泊する漁民」〔河岡 1987〕などで能地漁民の研究や紀州の漁民研究として引き継いでいる。

戦後の敬三の行動としては、敬三は昭和29年(1954年)11月の国際商業会議所理事会出席〔渋沢敬三伝記編纂刊行会 1981: 849〕の帰途、沖縄戦災校舎復興後援会会長として沖縄に立ち寄った際に、琉球政府富名城経済局長より「島尻郡中頭郡各村漁業調査」(沖縄県立水産試験場。昭

和4年調。当時島尻郡糸満町)などを借用しそれを謄写させている〔沖縄県立水産研究所 1954〕。この調査報告は「漁業別一覧表 糸満町漁業種類別」として、糸満町における魚別漁業従業者やその漁期などの一覧があり、当時、アメリカ合衆国統治下の沖縄にあって入手し難かった貴重な資料を入手し、それを出版したということに加え、敬三が時代を経た戦後においても「イトマン」や移動・出漁に対する興味関心が変わっていないことを示した事例となっている<sup>(58)</sup>。

このように、アチック関係者個人としての研究の継続や引継ぎ、その後の資料収集など「イトマン」や出漁・移住等に関する動向は戦後においてもあったのだが、それまでのアチックにおける調査・研究を踏襲するような「イトマン」や出漁・移住に対する報告や考察はアチック(財団法人日本常民文化研究所)でまとめられることはなかった。

ここまで見てきたように敬三の意思であった「イトマン」はアチックの「意志」となり調査・研究が行われたのであるが<sup>(59)</sup>、それはまとまった研究や報告という形にはならなかった。しかし、敬三はその意思を戦後まで継続していたのであり、条件や機会が整えば研究報告が刊行される可能性もあったと考えられる。この「イトマン」や移動・出漁といったキーワードは、報告としてまとまることがなかったため、アチックにおける研究史的観点としてこれまでふれられることが少なかった。しかし、この「イトマン」や移動・出漁というキーワードは、民具研究や「内浦漁民史料」などの水産業・漁業史研究と並ぶ研究課題であり<sup>(60)</sup>、敬三個人においても、民俗学・民族学的研究を志すきっかけとなった課題や興味であって、その興味関心は戦後まで続くような長期的研究課題でもあったのである<sup>(61)</sup>。

## 6. おわりに

敬三の調査・研究におけるポジションは直接調査を行う調査者ではない。調査・研究を全体的に俯瞰した場合、調査者を表舞台の人間とするならば、敬三は、後の報告書のための調査記録をするといった記録者や調査者間の仲介者という裏方のポジション(役割)である。このポジションとは、ひとつは、目立たないが重要なポジションであり、ひとつは、敬三にしかできないポジションであった。このような敬三のポジションは適当な名前がつけられないものであり、それは奇しくも敬三自身が晩年に希求した「コンダクター(指揮者)」<sup>(62)</sup>に近いポジションであった。

敬三は昭和38年(1963年)1月14日のNHKテレビ放送での東大教授安藤良雄との対談の中で次のように述べている(Aが安藤、Sが敬三)。

A ーございましょうね、そうしますと、結論的にですね、日本の……

S 実力はありますよ、日本は一大丈夫です。私はもう非常に将来を楽しんでいます。ただそのコンダクターの巧いのを探す……

A コンダクターがー

S これア、安藤先生なんかが、巧いのを作ってくれなくちゃアーお願いいたします。

[渋沢敬三先生景仰録編集委員会 1965a: 439]

これは日本経済の動きについての感想を求められた敬三の回答であるが、日本経済だけではなく、学問をはじめとした様々なことでも同様の考えであったろうと考えられる。また、敬三の死後に、朝日文化賞受賞直後のテレビインタビューが再映されたが、そこでも同様なことを語っており、テレビで語る敬三について角川源義は次のように述べている。



「命を奪つた病に衰弱されてゐた先生は、このテレビの中で、静かに日本への遺言をなされてゐる。今日の日本に名演奏家は決して少しとせぬが、最も必要なのは、一人の指揮者であると。それはさりげない表白だった。先生は日本の乏しいただ一人の指揮者だった。日本の学界も実業界も、暫くは指揮者不在の実感を深くすることだらう。」〔角川 1964：182〕

しかし、敬三は指揮者としてだけではなく、これまで見てきたように実際の調査地においてもアチックにおける自身の役割をこなし、自身の興味・関心に基づく「意志」の下にアチックの研究を導いていたのであり、その一つとして「イトマン」があったのである。

敬三がオーケストラに例えたことを借用するならば、アチックは楽団であり、敬三は「コンダクター（指揮者）」であるとともに「チームワークのハーモニアスデヴェロップメント」に必要な「コンサートマスター」でもあり、自身は謙遜して否定するが<sup>(63)</sup>、『日本釣魚技術史小考』や『日本魚名集覧』などを著すような研究者・調査者としての「プレイヤー（＝演奏者）」でもあったのである。そして「イトマン」は、「民具」や「水産史研究」という数あるレパートリーの中の重要な一つだったのである。

敬三は自身が亡くなる二年前に一つの文章を残している。本人は遺言書というのを嫌い「希望というものを述べてみたい」として次のような文章を書いている。

「自分は、財界に身を置いて、第一銀行であるとか、日銀であるとか、大蔵省であるとかいرونなところにお世話になったけれども、自分が一番生命としたものは、学問であったし、このアチック・ミュージアムであった。そして、はなばなしくはなかったし、あるいは、小さいと人は思っていたかも知れない。しかし、自分としては、まがいものでないほんとうの文化の一部をつくったという気持ちでいるし、もし、ここいらが人に理解してもらえれば、大変有難い。それで、何とか自分が死んでからも、もしそういうまがいものでない日本の文化をつくる方が、あるいは、まがいものでない社会をつくる方々の何かのお役に立てれば、自分は一番有難い。」〔渋沢 1965：76〕

敬三は「まがいものでないほんとうの文化の一部」を記録・作成するという思いをアチックの調査・研究の全般において抱いていたのであろう。そこには渋沢家の人間とか財界人といった肩書を取り払った「渋沢敬三」という人間がいたのであり、さまざまなことに興味を持ち、自己を振り返っては反省をし、それでも自分の意思を通しつつアチックという組織で研究を楽しんだ「渋沢敬三」という人間がいたのである<sup>(64)</sup>。しかし、一方で、肩書きを取り払った純然たる「渋沢敬三」（＝演奏者）にはなれないという自覚もあったのであろう。だからこそ敬三は自ら「コンサートマスター」や「コンダクター」たろうと努力し、晩年において各界に「コンダクター」を、また、自分に続くような「第二の敬三」を求めたのである<sup>(65)</sup>。

※第5章第1節は拙著「澁澤敬三が組織する共同研究—昭和九年薩南十島調査を事例に」〔小林 2014〕、また、第5章第2節第1項は拙著「民俗学・民族学的研究への興味とその萌芽」〔小林 2013〕をそれぞれ加筆修正した。

## 注

- (1) 当時、民俗学と民族学における学問領域としての明確な区分が無かった、あるいは敬三においては無かったと考えられるためこのような表記とした。
- (2) 敬三自身がどのように民俗学・民族学的研究に興味を持ったのかについては拙著「民俗学・民族学的研究への興味とその萌芽」を参照〔小林 2013〕。
- (3) 「戦争半ば過ぎに、アチックなる西洋人が住んでいるのかと度々尋問されたので対外的に常民文化研究所と改められた。」〔洪沢 1954：1〕。
- (4) 文中の「文献索隠」とはアチック同人の伊沢（五十沢）二郎の造語でいわゆる「索引」のことである〔市川 1973：290〕。
- (5) この聞き書きの時点では向山はアチックに関わっていないが、昭和26年（1951年）2月時点の「財団法人日本常民文化研究所 名簿」では「アチック同人」として記載されている〔財団法人日本常民文化研究所 1955：322〕。
- (6) 宮本常一も次のような感想を述べている。「調査旅行にあたってかならず何人かの人と同行したのは、できるだけ多くの人の眼で見ることによって、より正確に物の本質をつかむことができると考えたからであるが、こうした旅を重ねるうちに専攻を異にする人びとがあつまって、ある地域社会を見ることによって、いろいろの問題を追及していく緒が得られるのではないかと考えるようになって、昭和九年五月には薩南十島を多くの学者とともに巡航することになった。」〔宮本 2008：262-263〕
- (7) この昭和10年（1935年）は、柳田國男の還暦を機に開催された民俗学講習会（後に「民間伝承の会」へとつながる）が開かれ、民俗学が学問としての組織や方法の整う時期に当り、また民族学も前年に学会が組織され、アチックにおいても活動が盛んな時期に当たっていた。因みに「アチックマンスリー」の発行は同年7月30日であるが、発行が決定したのは7月4日とされている（『SCRAP』『アチックマンスリー 第一号』【昭和10年7月30日】）。
- (8) 『アチックマンスリー 第一号』「MEMORANDUM」を基に文中の語彙を尊重して作成。
- (9) 『アチックマンスリー 第八号』（昭和十一年二月二十八日）の「MEMOIRE」には「昭和九年秋以来、大きな抱負の下に準備中であつた文献索隠の第一巻が三月中旬に発行された。こゝに至る迄々として編輯し來れる五十澤二郎氏の労を多とせねばならぬ。五月より村上俊順氏が加はり、専ら地名索引を分擔。」とあり、五十沢と村上俊順が索隠室に関わっていることが分かる。
- (10) 同書では「一茶俳句集」のみ「高木氏」とされる。
- (11) たとえば昭和8年（1933年）から村上清文によって行われた新潟県三面調査や、昭和12年（1937年）5月の瀬戸内海調査に引き続き行われた三重県志摩崎島調査（同年7月に第二次調査）など。この内、志摩崎島については「その調査記録を原稿化して保管したのです。かなり大きな原稿になりました。それを戦時中、洪沢邸内の防空壕に入れておいたら、防空壕に火が入って焼けてしまったのです。そんなわけで、この和具村の調査は本にならなかつた。」〔山口和雄先生古稀記念誌刊行会 1978a：88〕という。
- (12) 洪沢史料館所蔵の16ミリフィルムカメラは「Cine-Kodak Model B」に「f1.9lens」を付けたものである。シネコダックは1923年発売、『*The British Journal Photographic Almanac and Photographers Daily Companion*』によると、重さは5ポンド、フィルム100フィートをセットできるカメラで、ロンドンで価格31ポンドであった〔小林 2012：302〕。
- (13) 民具資料収集においても「私共は今迄、此種の貴重な資料が、急激なる生活様式の改変と共に日を迫うて泯び行き再び眼にすること能はざるもの多きを憶ひ、微力を顧みず之を蒐集しその標本の保存に努力して参りました」〔アチックミュージアム 1936b：1〕として同種の理由を述べている。
- (14) 2013年7月現在。
- (15) 薩南十島調査において敬三は16ミリと写真機による撮影を行っているが、同調査の撮影者の中に、当時洪沢邸内に住み込みだった村上清文（『HAKUSO NEWS』『アチックマンスリー 第二号』【昭和10年8月30日】など）があり、おそらく、薩南十島調査のあった昭和9年（1934年）5月当時も邸内住み込みであったと考えられることから、敬三は自身の写真機（スチールカメラ）を村上に貸していたことが分かる（アチック写真ア-11-76など）。因みに昭和9年11月4日に綱町邸で撮影された足半作成時の16ミリフィルムは村上清文が撮影している〔渡部 1964：7〕。アチックでの16ミリ撮影については拙稿「二つの花祭—アチッカー六ミリフィルム「花祭（綱町邸）」と「花祭（三河北設楽郡）」—」を参照〔小林 2012〕。
- (16) たとえば、アチック写真には馨太郎撮影による髪形や服装を主題とした写真が多く残されている（神奈川大学日本常民文化研究所アチック写真本目録参照 [http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/attic\\_photo/photos/seach](http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/attic_photo/photos/seach) 2014年12月15日現在）。宮本馨太郎（1911年～1974年）は『かぶりもの・きもの・はきもの』（岩崎美術社 1968年）に見られるように服飾の研究や民具の研究、文化財保護法の制定に参加するなど物質文化研

- 究を進めた人物であった（宮本記念財団 Web サイト参照）。
- (17) 敬三がそこまで意図していたかはまだ検討の余地があるがここでは結果的にそのように評価できる写真になっている。敬三は「早川さんを偲ぶ」の中で、早川の『花祭』に対して「本著の出現で、早川さんの民俗学における能力は高く評価されたが、いろいろ話し合っている中に花祭の奥に、また基底にある宗教学的または社会学的経済史的、さらには、農村地理学的面についての解明に不十分な点も感じられた」〔渋沢 1957：3〕とし、芸能研究として高い評価をする一方、芸能研究だけに留まらない総合的な研究の必要性を指摘している。ほかにもアシナカのレントゲン撮影や 16 ミリフィルム『花祭（三河北設楽郡にて）』と『花祭（東京三田綱町邸）』の撮影などもこのような視点に基づいている〔小林 2012：322〕。これらのことから、調査や研究に関わる自身の写真撮影において、ただ「天下將軍」を撮影するだけではなく、周囲の景色全体を画角に収めて撮影した可能性は十分に考えられる。
- (18) たとえば『十嶋鴻爪』（No. 9）など。
- (19) 報告書に載せるといった場合、掲載に堪え得る撮影技術が問題となるわけだが、表 1 の一覧に基づく敬三撮影の写真を見る限り、他のアチック写真と大差はない。
- (20) 勿論、これら当地の人々を写し記録として残す記念撮影・記録撮影的側面での写真は敬三だけが撮影したのではない。たとえば薩南十島調査においてはア-11-77「小宝島の島民の記念写真」高橋文太郎撮影などがある。
- (21) この 16 ミリフィルムは昭和 9 年（1934 年）11 月 3 日の日本青年館記念行事としての民俗展会場でイタヤ細工実演を行った渡部小勝に、同日中に改めて綱町邸で実演してもらったもので、渡部によると大西伍一が黒板にチョークで作業の要所で説明のタイトルを入れる係で撮影は敬三であったという〔渡部 1964：6-7〕。
- (22) この場合の調査者には 16 ミリ撮影を担当していた敬三自身も含まれる。たとえば『男鹿、能代、藤琴、石神、八戸』（No. 11）では石黒忠篤や村上ら調査者を映していく映像（0：14：03～0：14：46）の最後に、敬三が映る映像が付けられている（0：14：38～0：14：46）。これも調査者証明の一環であったと考えられる。
- (23) アチックでの上映は「その時分十六ミリをとり出したから、そんなものを写すときには書斎を使うようになりましたけれどもね。」〔村上 1979：519〕との村上の言にもあるように、綱町邸の書斎で行なわれたという。
- (24) 因みに『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』（No. 12）の場合、イタヤ細工作成と共にその作成者を映像に残すという撮影方針が確認でき、また、敬三やアチックは、作成過程や作成物ならびにその作成者を映像に映し、それに解説を加えた上映までを含めて一つの資料として考えていたと指摘できる。
- (25) 写真の場合も 16 ミリと同様に上映会とその解説があったと考えられる。たとえば、薩南十島調査の場合、その会に出席した祝は「宮本さんに会ったのは十島遠征記念会の席上で金ボタンの学生服だったが写真の説明など大人びてゐた。」（『HOBBY 人間を中心とせるアチック新館前史』『アチックマンスリー 第十三号』【筆名ホウリ・宮静。昭和 11 年 7 月 30 日】）としており、この「十島遠征記念会」は補訂版「アチック来訪者芳名簿」の「6 月 29 日 十島会」にあたりと考えられる〔公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館蔵 作成年不明：24〕。
- (26) このような新聞取材をなぜこの時期に受けたのかだが、『豆州内浦漁民史料上巻』刊行は昭和 12 年（1937 年）で、刊行までにはまだ期間があり、宣伝と言う意味での緊急性や必然性は見当たらない。同紙記事中の写真キャプションに「写真は昨夜の澁澤さん」とあって同紙の日付「八月十日」の前日である 8 月 9 日に取材を受けたことが分かる。この取材を受けたことは、取材日の三日前にあたる昭和 10 年（1935 年）7 月 31 日～8 月 6 日に日本青年館で開かれた「日本民俗学講習会」と関係があるかもしれない。このことについては今後の研究課題としたい。
- (27) 「昭和十二年一月元旦から取りかかった日本魚名集覧及び魚名考も数年の労作で出来上つた。之と並行して約三千名にのぼる漁民事蹟略とも称すべき人名索引も編纂した。」〔渋沢 1954：2〕
- (28) もちろん、アチックにおける 16 ミリ撮影は敬三だけが行っていたのではなくアチックの関係者も撮影をしていた〔小林 2012：304〕。しかし、『犬歩当棒録』の「第 3 部 旅譜と片影」〔渋沢 1961a〕で確認できる敬三が直接採訪した調査地での 16 ミリには敬三が映し出されることが少ない。これは敬三が撮影者であったために映っていないからだと考えられる。
- (29) 『豆州内浦漁民資料』は敬三が静岡県三津に静養していた間に発見した資料を整理しまとめた資料集である。本論第 2 章 2）において敬三自身の影響力と自身の態度などについての言及にふれたが、その昭和 10 年（1935 年）の引用中、「然し振り返つてアチックの過去を追憶し眼を現在迄廻轉させた時自分としては云ひ知れぬ自己の我儘な暴逆とその責任を感じ重いかたまりが胸を打つ。たとへその思想は許されるにしても成果の上に暴露された力なきみじめさを観て。」〔渋沢 1935：1〕の「我儘」は敬三の意思として読み替えることも可能であろう。また「たとへその思想は許されるにしても成果の上に暴露された力なきみじめさを観て」とは何をさしているのだろうか。推測でしかないがおそらくこの発言以前の時期にあたるアチックの玩具研究時代における成果に対するの自戒であろうと考えられる。これらについては今後の研究課題としたい。
- (30) 因みに桜田は後年になって「改定 船名集」〔桜田 1980a〕や「船の名を集めてみて」〔桜田 1980b〕などにおいて漁船の研究を行っている。「漁船調査について」の記述はこれらの研究をする以前のことを指し、「當研

究所の事業」との記述がある所からもおそらくそれはアチック時代のことであると考えられる。

- (31) しかし、アチックの研究（民俗学や民族学、水産業・漁業史研究など）以外の場面において敬三がその意志を強制的に行使したという事例もある。『渋沢栄一伝記資料』編纂において、それまで編纂に関わっていた太田慶一が出征、その代わりに山口が編纂に携わることになったのだが、山口によると「車中、先生は「こんど太田慶一君が出征するので留守中祖父の伝記資料編纂を君が代わってやってもらいたい。主任の土屋君（喬雄先生）も希望している」と言いだされた。全く突然の話である。当時私の漁業史研究はかなり進んでおり、油の乗りきった時だったので、この話には内心かなりの抵抗を感じた。そこで、一週の半分をそちらにさくのではどうかと尋ねると、それはだめだと言下にことわられた。その時の先生の態度には平素とちがった、侵すべからずといったところがあり、私は改めて先生のちがった一面にふれた思いがしたのであった。」〔山口和雄先生古稀記念誌刊行会 1978b：288〕と述べている。敬三のこのような態度はめずらしく、管見ながらほかには見当たらない事例である。敬三の強制的な意志については今後の研究課題としたい。
- (32) 山口によると『土佐捕鯨史』（昭和18年）などをまとめた伊豆川浅吉に対して「渋沢先生が、お体が大きかったせいか、“君、大きいから鯨をやれよ”と言われてね（笑）。捕鯨史をまずやりました。」〔山口和雄先生古稀記念誌刊行会 1978a：80-81〕ということがあったという。これは敬三の「思いつき」とも言えるが、伊豆川がそれを否定せずに捕鯨研究を行ない、その後、研究書としてまとめている点からも、強制されたとは言えない事例と考えられる。
- (33) 論者は既に「渋沢敬三が組織する共同研究一昭和九年薩南十島調査を事例に」として十島調査について論述したことがあり〔小林 2014〕、ここでは既論文と重複する部分もあるが調査の概要や特徴を表すためにこれに加筆しつつ記述した。またこの節では前述にて名称の省略をした人物も改めて姓名を記した。
- (34) 三宅宗悦（1904～1945）については拙著「渋沢敬三が組織する共同研究一昭和九年薩南十島調査を事例に」〔小林 2014〕を参照。
- (35) 亀彦弟。生物学、郷土史家。大正9年（1920年）奄美大島島庁勤務、昭和5年（1930年）同島支庁郡視学。昭和8年（1933年）『南島雑話』を刊行。当時は鶴嶺高女教諭。〔国分 1984：229-231、桜田 1979：874、渋沢 1993a：249〕。
- (36) 喜界島出身で元中之島小中学校校長〔皆村 2006：58〕。
- (37) 永井が『南島雑話』（昭和8年【1933年】、白塔社）出版に際し小出から校本を借用している〔桜田 1979：874〕。
- (38) その間柄に関しては上記のような親しい関係といった人々から大西のような最近に知り合った人まで様々であった。因みに大西は昭和9年（1934年）の春先に吉田三郎の原稿を持って敬三の元を訪ねており〔大西 1972：2〕、知り合ったのは最近であった。
- (39) たとえば、前述『南島雑話』、白野夏雲作『十島図譜』（鹿児島県十島村役場編、昭和8年4月、単美社）など。因みに『十島図譜』序文は柳田國男（昭和8年3月記）。
- (40) 因みにこの時、永井は早川に出会ったという〔早川 1976：196〕。
- (41) 「今からちょうど二十年前、昭和九年五月（注、ママ）、ようやく待望していた百五十トン・セミ・ディーゼルの十島丸がこの村の島々を専門に就航することになったのが、われわれの十島行きが実現した一番の契機であろう。」〔渋沢 1993a：249〕
- (42) 祭魚洞文庫とは、敬三の死後、日本通運株式会社を経て流通経済大学に寄贈された敬三個人の旧蔵文献・図書をいう〔高木 1971：129〕。
- (43) 詳細は以下の通り。
- ・『櫻島噴火記』（鹿児島県立図書館、昭和6年11月）
  - ・隠岐汽船株式会社『隠岐遊覧案内』（昭和5年7月。パンフレット）
  - ・谷口態之助『十島村探訪記』（鹿児島高等農林学校校友会 昭和9年7月。『鹿児島高等農林学校校友会報8号』別刷）
  - ・高橋文太郎『奄美十島及大島に於ける民具』（『旅と伝説 第7年8月号』別刷）
  - ・『寶島現状』（昭和9年。謄写版）
  - ・『中之島を語る』（昭和9年。謄写版）
  - ・『忘れられ勝の小宝島 昭和九年度』（昭和9年。謄写版）
  - ・『中之島盆踊歌詞』（謄写版）
  - ・『傳書覺』（謄写版）、
  - ・『硫黄島要覧』（硫黄尋常高等小學校 昭和8年10月。謄写版）
  - ・『花の大阪（婦人より聞き取りて記す）一番踊の歌』（謄写版）
  - ・稲江清二『浜ノ既ニ消ヘシ俊寛僧正ヲ偲ブ我が校ノ教育』（昭和8年10月。謄写版）
  - ・稲江清二『本校ノ農業教育』（昭和9年4月。謄写版）

- ・『硫黄島区民ノ生活史』（謄写版）
- ・麓幸雄『竹島を語る』（昭和8年7月。謄写版）
- ・『鹿児島縣大島郡十島村勢要覧』（昭和9年。謄写版）

この中の隠岐汽船株式会社『隠岐遊覧案内』は薩南十島調査後の隠岐調査に関わるパンフレットと考えられる。また谷口態之助『十島村探訪記』と高橋文太郎『奄美十島及大島に於ける民具』は調査後に発行された報告書である。

- (44) この『十島雜綴』は上下巻とも製本され、背表紙に「十島雜綴（上）昭和九年十島探訪紀念 宮本蔵書」刻印とされ（下巻も同）、上巻二枚目に「昭和九年五月 十島探訪紀念 宮本馨太郎編」と書かれている。また、下巻には「附録」として奄美大島の報告や「十島探訪隊関係新聞記事切抜」が付されている。
- (45) 同新聞に「二十一日午後三時二十六分熊本駅通過福岡」とある。
- (46) この「鹿児島朝日新聞」の記事のように、新聞記者の帯同は調査にとって予想外の事態であった。しかし敬三は結果的にこれを利用し、帯同の記者だけでなく前述の「筑後新聞」の記事など各メディアを利用して、十島の現状や総合的な調査としての報告書までを含む薩南十島調査全体の宣伝のため、スポークスマンの立場で発言している。これなども、敬三自身の地位や知名度を利用した敬三ならではの調査協力的一端と言えるであろう。
- (47) 昭和9年（1934年）10月時点。昭和11年（1936年）に早川が農村更正協会嘱託として九州を離れるまで九州帝大に属していたため（早川 2003 436）、ここでは九州帝大側とした。また、同様に昭和15年（1940年）5月時点で、桜田はアチックに属していたため（昭和10年5月より〔桜田 1979：889〕）アチック側とした。
- (48) 九州と東京という長距離間における地理的な問題のほか、昭和11年（1936年）に早川が農村更正協会嘱託〔早川 2003：436〕、昭和13年（1938年）に小出が東京高等農林学校校長〔大西 1968：87〕など、九州帝大メンバーの離散ということもこれに関係していたと考えられる。また、このような十島調査の経験や反省点から、アチックでのその後の調査では、アチック主導で行なえる民俗学に基づく共同調査を行なうようになったと考えられる。これについては拙著「澁澤敬三が組織する共同研究—昭和9年薩南十島調査を事例に一」〔小林 2014〕を参照。
- (49) これについては拙著「民俗学・民族学的研究への興味とその萌芽」〔小林 2013〕を参照。
- (50) 敬三が柳田に初めて会うのは大正3年（1914年）4月の「武州大嶽、氷川、日原」旅行の帰途である〔渋沢 1961a：354〕。
- (51) 因みに、この付紙の文言中には「二、用途、何を運ぶか簡単に御知らせ願いますれば幸いです。」とあり、後の報告書作成に関する事後確認を行おうとしていたと考えられる。
- (52) このようにそれぞれが分かれ、またそれぞれの興味において調査をしているあたりにも本格的な調査ではない予備調査の性格がみてとれ、まだ研究分担的な組織までには至っていなかったという実情がわかる。
- (53) 平成23年（2011年）の16ミリ上映会にて名前が判明し、奄美大島から中之島に初めて住み着いたとされることは上映会や前述の聞き書き調査より判明した。
- (54) この小宝島の女性の映像の場合、徳丸邸の映像と違って、16ミリ全体の構成を考えたときに、イサや女性の髪形など民俗事象としての記録性において、キャプションを入れるに相応する内容であったと判断したと考えられる。
- (55) たとえば前述の昭和11年（1936年）調査である「朝鮮多島海」調査（昭和14年刊行『朝鮮多島海旅行覚書』）では「四国、淡路」調査〔渋沢 1961a：446-447〕、昭和12年（1937年）調査である「瀬戸内海」調査（昭和15年刊行『瀬戸内海島嶼巡訪日記』）では「志摩崎島」調査を行ない〔渋沢 1961a：450〕、第一の調査が大学教授や調査に関連する研究者といったアチックの枠だけに留まらない人員構成の調査であるのに対し、第二の調査ではアチック同人を中心とする人員構成の調査であった。これら第一・第二の調査の関連については今後の研究課題としたい。
- (56) 昭和初期における糸満漁民の出漁範囲は「沖縄旧糸満町出身の糸満漁民の出漁範囲は、日本海側では、奄岐・対馬から、島根県の隠岐、八束郡鹿島町、京都府舞鶴市の大浦半島、そして、新潟県佐渡に及んで」〔野地 1997：85〕いたとされており、広範囲であった。
- (57) この「仏島について」は著作集掲載以前の未公刊論文〔山口 1993：446〕。
- (58) 他には「海村の郷土資料」にも「その他、特種の伝統を有って、集団を成していた琉球の糸満の人々、九州長崎地方の家舟、豊後沿岸地方のシャアの部落、更に三重県の志摩を中心とした蟹とか北陸地方のアマベ等のように特異な生活形態を営んでいる団体、また、これらの中にも土着をせず季節的に、または一時的に移動性のあるいわば一種のシイ・ジブシイの如きものもあります。」〔渋沢 1993d：241〕として糸満や家舟、シャアなどの記載と共に、「糸満の人は小さな舟で金華山までも来るのである。」〔渋沢 1993d：243〕とも記載している。因みにこの「海村の郷土資料」は著作集掲載以前の未公刊論文〔山口 1993：446〕。
- (59) おそらく『朝鮮多島海旅行覚書』や『瀬戸内海島嶼巡訪日記』も「イトマン」や移動・出漁研究の文脈上に

位置づけられると考えられる。これについては今後の課題としたい。

- (60) 直接的に移動・出漁に関する事例ではないが、アチック・ミュージアム・ソサエティ時代の研究課題であった玩具研究において敬三は次のように述べている。「自分としてかなり問題にして居たのは、甲の村では盛んに玩具を産み出すのに、その隣には全く知らん顔をして居た村があつたりする。その差異の原因についてとか、又ある信仰に基く特殊の玩具や縁起もの、製作動機とか、或は玩具等の地方的分布を見て居る中に、何等かの系統を発見し、そこからその傳播型式の様なもの、少しは解りはしまいかと云ふこと等であつた。」〔渋沢 1933a : 3〕このような問題意識のもと、アチック（アチック・ミュージアム・ソサエティ）ではだるまを個別事例として取り上げ、分布状況や系統、変化などの研究を行った。この玩具研究におけるだるまの研究は敬三が後に「結局何等得る所がなかつた」〔渋沢 1933a : 3〕として結果的には失敗に終わっているが、このだるま研究では、製作における技術の移動や伝播を調べようとしていた。この時点における敬三やアチック（アチック・ミュージアム・ソサエティ）の研究課題としても、移動（伝播）というキーワードがあったと考えられる。
- (61) 雅英によると、戦後親子で仙台の金華山沖に出かけ船が転覆するぐらいの漁（サンマカ）を見学したことがあるという。その時にも金華山沖まで出漁に来ていた人々の話を聞いた記憶があるという（2013年12月、論者聞く）。
- (62) 有賀喜左衛門が「還暦祝賀記念論文執筆者招待会」（昭和33年2月22日）において敬三をオーケストラのコンダクターにたとえている〔渋沢 1961b : 226〕。
- (63) 例えば、東洋大学名誉学位贈呈でもつぎのような答辞を述べている。「元来、わたくしは、学者でもなければ専門家でもございません。何にも力のない自分ですが、人間である以上は、エエ、どういっていいか、自分でもよくわかりませんが、まあ、よくいえば、何でも問題にとり上げるたちでございます。」〔渋沢敬三先生景仰録編集委員会 1965b : 20〕
- (64) 敬三晩年のNHKテレビ放送での東大教授安藤良雄（A）との対談の中でも次のように述べている（敬三 S）。「A それ、まあ特に渋沢民俗学の特長という訳なんです。S つまり、日本の基盤をもっとはつきりさせたい—実際、やって来たのは吾々庶民なんですから—偉い人は、ただそれを治めただけなんですから。」〔渋沢敬三先生景仰録編集委員会 1965a : 439〕また、同書で安藤の実業家であり学者である文化人が増えてきたことについての質問でも「非常に結構だと思うんですね、どんどんそう言う方が出られるといいと思います。それから、これを二つに分けて考える事が、寧ろ間違いで、人間の本は一つだと思うんですから、学者だとか、実業家だとか、新聞人だとかいって、いやに概念に固定させて人を見るという方が間違ってるんじゃないですか。」〔渋沢敬三先生景仰録編集委員会 1965a : 436-437〕と述べている。ここにも肩書を取り払った本質を見る視点を敬三が持っていることが分かる。
- (65) ここまで見てきた敬三の研究におけるポジションや長期的研究課題であった「イトマン」のように、アチックや敬三の研究の足跡については検討の余地が多く残されており、アチック史、並びに敬三研究の必要性が問われているといえよう。

---

## 参考文献

- アチックミュージアム 1935~1939『アチックマンスリー』第一号~四四号 アチックミュージアム（『アチックマンスリー』からの引用の場合、詳細はその都度本文中に記載）
- アチックミュージアム 1936a『民具蒐集調査要目』アチックミュージアムノート第7 アチックミュージアム
- アチックミュージアム 1936b『所謂足半に就いて』アチックミュージアム彙報8 アチックミュージアム
- 市川信次 1973「昭和十年頃のアチック・ミュージアム」渋沢敬三伝記編集刊行会 1979『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編集刊行会 pp. 289-291（昭和48年5月15日記。初出は『日本常民生活資料叢書月報17』）
- 小川徹 1979「宮本馨太郎さんの横顔—アチック時代—」宮本記念財団webサイト（<http://www.miyamoto-kinen.org/hito/yokogao.htm> 閲覧日2015年2月7日）
- 小川直之 2004「画像資料と民俗学」『人文科学と画像資料研究』國學院大学日本文化研究所
- 沖縄県立水産研究所 1954「漁業別一覧表 糸満町漁業種類別 島尻郡中頭郡各村漁業調査」財団法人日本常民文化研究所 1955「沖縄県水産資料」財団法人日本常民文化研究所（昭和4年調。序文に「この文献は、当研究所顧問渋沢敬三先生が一九五四年一月欧州旅行の帰途沖縄に立ち寄られた際、琉球政府富名城経済局長より貸与されたもの」とある）
- 大西伍一 1968『私の聞き帖』慶友社
- 大西伍一 1972「吉田三郎君との出会い」『日本常民生活資料叢書 月報4』三一書房 pp. 1-2
- 角川源義 1964「指揮者」『民間伝承 渋沢敬三先生追悼特集号 NO. 266 10月号 第二十八巻 第四号』六人社 pp. 181-182

- 神奈川大学日本常民文化研究所編 2002「アチックミュージアム日誌(2) 昭和十一年一月～二月」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集 18』平凡社 pp. 239-292
- 株式会社時事新報社 1935「屋根裏博物館から世に送る漁業史 若き澁澤子が漁村で掘り出した貴い史料 秘かな研究の結實」『時事新報』(昭和10年8月10日夕刊) 株式会社時事新報社
- 河岡武春 1973「解説」『日本常民生活資料叢書 第二十巻』三一書房 pp. 823-839
- 河岡武春、二野瓶徳夫、丹羽邦男、山口和雄、山口徹、網野善彦 1986「座談会 2 渋沢敬三と日本常民文化研究所」『歴史と民俗 1』平凡社 pp. 322-350
- 河岡武春 1987『海の民—漁村の歴史と民俗—』平凡社(「黒潮の海人」は初出『山民と海人 日本民俗文化体系 5』小学館【1985】、「漂泊する漁民」は初出『民間伝承 一五巻三号』【1951】、いずれも同書に所収)
- 公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館 2012『渋沢雅英氏オーラルヒストリー』公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館
- 公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館蔵 作成年不明「補訂版 アチック来訪者芳名簿」公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館
- 国分直一 1984「『南島雑話』解説」国分直一・恵良宏『南島雑話 2』東洋文庫 432 平凡社 pp. 229-241
- 小林光一郎 2012「二つの花祭—アチック—六ミリフィルム「花祭(網町邸)」と「花祭(三河北設楽郡)」—」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集 28』平凡社 pp. 299-328
- 小林光一郎 2013「民俗学・民族学的研究への興味とその萌芽」『渋沢敬三没後50年 企画展図録 祭魚洞祭』公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館 pp. 104-107
- 小林光一郎 2014「澁澤敬三が組織する共同研究—昭和九年薩南十島調査を事例に」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か—日本民族学の二〇世紀—』東京堂書店 pp. 132-153
- 財団法人日本常民文化研究所 1955「財団法人 日本常民文化研究所 名簿」『常民文化研究 第69 常民文化論集 1』財団法人日本常民文化研究所 pp. 321-322
- 桜田勝徳 1935『隠岐島前に於ける 糸満漁夫の間書 隠岐調査報告第二』アチックミュージアムノート第4 アチックミュージアム
- 桜田勝徳 1938「漁船調査について」アチックミュージアム『アチックマンスリー 第四十号』(昭和十三年十一月十二月昭和十四年一月合併) アチックミュージアム
- 桜田勝徳 1949「出漁者と漁業移住」日本民俗学会『海村生活の研究』日本民俗学会 pp. 104-113
- 桜田勝徳 1979「(三) 敬三とアチックミュージアム」『澁澤敬三 上』渋沢敬三伝記編集刊行会 pp. 845-924
- 桜田勝徳 1980a「改訂 船名集」『桜田勝徳著作集 3 漁撈技術と船・網の伝承』名著出版 pp. 147-243 (初出は1963~1966『海事史研究』一~七)
- 桜田勝徳 1980b「船の名を集めてみて」『桜田勝徳著作集 3 漁撈技術と船・網の伝承』名著出版 pp. 244-251 (初出は1952『民間伝承 16巻10号』)
- 桜田勝徳 1982「IV 年譜・著作目録」『桜田勝徳著作集 7 未刊採訪記〔II〕・回想記』名著出版 pp. 559-589
- 桜田勝徳・山口和雄 1935『隠岐島前漁村採訪記 隠岐調査報告1』アチックミュージアムノート3 アチックミュージアム
- 桜田勝徳・山口和雄編 1936『美保関・広島三津・伊予大三島 漁村採訪記』アチックミュージアムノート第5 アチックミュージアム
- 時事新報社 1935「屋根裏博物館から世に送る漁業史 若き澁澤子が漁村で掘り出した貴い史料 秘かな研究の結實」『時事新報』時事新報社(昭和10年8月10日夕刊)
- 渋沢敬三 1933a「アチックの成長」『祭魚洞雑録』郷土研究社 pp. 1-10 (初出は昭和8年(1933)9月)
- 渋沢敬三 1933b「南島見聞録」『祭魚洞雑録』郷土研究社 pp. 11-138 (初出は大正15年~昭和2年『龍門雑誌』)
- 渋沢敬三 1935「アチック根元記(一)」アチックミュージアム『アチックマンスリー 第一号 昭和十年七月三十日』アチックミュージアム(筆名は「祭魚洞生」)。
- 渋沢敬三編著 1937「本書成立の由来」『豆州内浦漁民史料 上巻』アチックミュージアム pp. 1-27
- 渋沢敬三 1954「自序」『祭魚洞襍考』岡書院 pp. 1-4
- 渋沢敬三 1957「序 早川さんを偲ぶ」早川孝太郎『花祭』岩崎書店 pp. 1-4
- 渋沢敬三 1961a「第3部 旅譜と片影」『犬歩当棒録』角川書店 pp. 339-589
- 渋沢敬三 1961b「還暦祝賀記念論文執筆者招待会」『犬歩当棒録』角川書店 pp. 212-229
- 渋沢敬三 1993a「二十年前の薩南十島巡り」『渋沢敬三著作集 5』平凡社(初出は昭和28年5月20日『朝日新聞』昭和28年5月16日記) pp. 249-251
- 渋沢敬三 1993b「日本民族と漁業」『渋沢敬三著作集 5』平凡社 pp. 208-227 (初出は昭和11年5月25日『龍門雑誌』第五百七十二号付録、昭和11年4月記)
- 渋沢敬三 1993c「仏島について」『渋沢敬三著作集 5』平凡社 pp. 228-234 (昭和15年4月28日記。初出は不

明)

- 渋沢敬三 1993d「海村の郷土資料」『渋沢敬三著作集 5』平凡社 pp. 241-244 (執筆時期・初出不明)
- 渋沢敬三先生景仰録編集委員会 1965a「テレビ対談「昭和財界史 教育テレビ 教養特集—「日本回顧録」」『渋沢敬三先生景仰録』東洋大学 pp. 415-439
- 渋沢敬三先生景仰録編集委員会 1965b「答辞」『渋沢敬三先生景仰録』東洋大学 pp. 20-22
- 渋沢敬三伝記編纂刊行会 1981『渋沢敬三 下』渋沢敬三伝記編纂刊行会
- 渋沢雅英 1965「挨拶」渋沢敬三先生景仰録編集委員会『渋沢敬三先生景仰録』東洋大学 pp. 75-77
- 渋沢雅英 1967『父・渋沢敬三』実業之日本社
- 高木征三 1971「祭魚洞文庫について」『流通経済論集 6』流通経済大学 pp. 129-146
- 高橋文太郎 1933「朝日山麓三面村記」『山岳 第28年3号』日本山岳会 pp. 39-63
- 中山正則 1956「柏葉年譜」『柏葉拾遺』柏窓会 pp. 1-4
- 日本銀行調査局編 1974『日本金融史資料 昭和編 第三十五巻』大蔵省印刷局
- 野地恒有 1997「島根県隠岐島・西ノ島町船越のトビウオ漁と糸満漁民 一出漁漁民の非移住と在来漁業の関係—」『愛知教育大学研究報告 第46輯 人文・社会学編』愛知教育大学
- 早川孝太郎 1976「薩南十島を探る」宮本常一・宮田登編『早川孝太郎全集 第九巻 島の民俗』未来社 pp. 195-215
- 早川孝太郎 2003「四 写真と絵でつづる早川孝太郎の時代」宮本常一・宮田登・須藤功編『早川孝太郎全集 第十二巻 雑纂・絵と写真』未来社 pp. 329-652
- 牧田茂 1998「郷土会」『柳田國男事典』勉誠出版株式会社 pp. 440-446
- 皆村武一 2006『村落共同体崩壊の構造 トカラの島じまと臥蛇島無人島への歴史』南方新社
- 宮本記念財団『十島雑綴(上)』、『十島雑綴(下)』宮本記念財団所蔵資料
- 宮本常一 2008「補遺三(削除分)」田村善次郎編『渋沢敬三 宮本常一著作集 50』未来社 pp. 259-284
- 宮本瑞夫 2005「渋沢敬三先生のアチック・ミュージアムと宮本馨太郎 一宮本馨太郎日記抄(二)—」『立教女学院短期大学紀要第36号』立教女学院短期大学 pp. 75-84
- 向山雅重 2013「向山雅重『野帳』翻刻」(記載は昭和11年6月21日。翻刻者櫻井弘人) 2013『伊那民俗研究 第20号』柳田國男記念伊那民俗学研究所 pp. 67-81
- 村上清文 1973「秋田マタギ資料・三面行・澁澤民俗学と「工」」『日本常民生活資料叢書 月報15』三一書房 pp. 3-4
- 村上清文 1979「村上清文氏談話」『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会 pp. 504-525
- 山口和雄先生古稀記念誌刊行会 1978a「2 アチック・ミュージアム時代」『山口和雄先生古稀記念 黒船から塩の道まで 一研究史的回顧—』財団法人日本経営史研究所 pp. 51-111
- 山口和雄先生古稀記念誌刊行会 1978b「渋沢先生的一面」『山口和雄先生古稀記念 黒船から塩の道まで 一研究史的回顧—』財団法人日本経営史研究所(初出は『日本経済新聞』【昭和42年5月20日朝刊】) pp. 287-289
- 山口徹 1993「解題 渋沢敬三を再評価するために」『渋沢敬三著作集 5』平凡社 pp. 443-457
- 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所 2002『屋根裏の博物館 一実業家渋沢敬三が育てた民の学問—』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 流通経済大学所蔵祭魚洞文庫蔵 作成年不明『櫻島噴火記』(請求記号 291.97-5) 流通経済大学所蔵祭魚洞文庫
- 渡部小勝 1964「追憶」『渋沢敬三さんの想い出—』日本の民具第一巻付録(昭和39年10月25日発行)慶友社 pp. 6-8
- 〈参照 URL〉
- 宮本記念財団 HP : <http://www.miyamoto-kinen.org/hito/yokogao.htm> (閲覧日 2015年2月7日)
- 〈参照動画資料〉
- 公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館 渋沢敬三関係フィルム『糸満(海上)』(no. 39)、『隠岐 I』(no. 40)、『隠岐 II』(no. 41)、『隠岐四』(no. 42)、『漁業』(no. 56)
- 神奈川大学日本常民文化研究所所蔵『越後三面行』、同所蔵『十嶋鴻爪』、同所蔵『花祭(三河北設楽郡にて)』、同所蔵『男鹿、能代、藤琴、石神、八戸』、同所蔵『志摩崎島』、同所蔵『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』。
- ※尚、これら DVD-R は Windows Media Player にて再生、タイムカウントやカット数などを計測し数値化した。



表1 渋沢敬三撮影写真一覧（日本常民文化研究所所蔵アチック写真より）

本表は、神奈川大学日本常民文化研究所所蔵アチック写真本目録を一部改訂したものである。

・表中、「南島見聞録」は渋沢敬三『祭魚洞雑録』（1933 郷土研究社）、「旅譜」は『大歩当棒録』（1961 角川書店）、「朝日山麓三面村記」は高橋文太郎『山岳』第28年3号（1933 日本山岳会）、「越後粟島探訪録」は高橋文太郎『旅と伝説』第6年11号（1933 三元社）、「越後三面行」（No.6）は神奈川大学日本常民文化研究所所蔵動画資料『越後三面行』（2004 神奈川大学日本常民文化研究所）をそれぞれ表す。

・表中、特に注記のない場合、「カ」は推定を表し、「敬三」は渋沢敬三、「高橋」は高橋文太郎、「早川」は早川孝太郎、「村上」は村上清文、「石黒」は石黒忠篤、「井野」は井野碩哉とした。

・ネガフィルムと紙焼きが同一（重複）の場合は紙焼きを優先しネガフィルムの資料は割愛した。

## 【凡例】

・表の項目について

「目録番号」……神奈川大学日本常民文化研究所におけるアチック写真の目録番号。

「外装記載」……写真資料が内包されていたアルバムや封筒などに記載された

文字情報。判読不能で文字数も不明な場合は「」を入れた。

「題名」……アチック写真資料本目録作業時に付けられた題名。

「台紙記載」……写真資料が添付されている台紙の文字情報。

「写真法量」……写真資料の法量（寸法）、単位／ミリ。

「撮影年月日」……写真資料が撮影された年月日。

「撮影地」……写真資料が撮影された撮影地。

「典拠」……写真資料の①撮影者、②撮影年月日、③撮影地のそれぞれの典拠。

「備考」……上記以外の特記事項。

目録番号	外装記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量			撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	面積	開始年	開始月日	終了月日			
ア 11 78	[ ]	小宝島の島民の記念写真	283 (ナンバリング、青イソク) 小宝島 (渋沢敬三作)	80	108		昭和9年 (1934年)	5月 16日		鹿児島県 小宝島	①③台紙記載参照 ②「旅譜」p434	・国際常民文化研究所機構研究グループ1-3 板井氏現地調査(2011年7月29日)により名前が判明したア-11-80、81に写る「若下ウシ、若下トヨカメ」らが確認できる ・写3-4-3にネガフィルムあり
ア 11 79	[ ]	小宝島の島民の記念写真	284 (ナンバリング、青イソク) 小宝島 (渋沢敬三作)	80	108		昭和9年 (1934年)	5月 16日		鹿児島県 小宝島	①③台紙記載参照 ②「旅譜」p434	・国際常民文化研究所機構研究グループ1-3 板井氏現地調査(2011年7月29日)により被写体の人物は「前村与一 (十島丸船長・故人)、安永寺内 (コウナイ・現三島村出身・三島村元村長・故人)」と判明 ・写3-4-4にネガフィルムあり
ア 11 80	[ ]	小宝島の島民の記念写真	285 (ナンバリング、青イソク) 小宝島 (渋沢敬三作)	81	107		昭和9年 (1934年)	5月 16日		鹿児島県 小宝島	①③台紙記載参照 ②「旅譜」p434	・国際常民文化研究所機構研究グループ1-3 板井氏現地調査(2011年7月29日)により被写体の人物は「若下トヨカメ夫妻 (夫の名前は不詳、夫妻ともに故人)、トミエ (故人)、昭代 (小宝島に健在)、美行 (ミユキ・男児・故人)」と判明 ・写3-4-5にネガフィルムあり
ア 11 81	[ ]	小宝島の島民の記念写真	286 (ナンバリング、青イソク) 小宝島 (渋沢敬三作)	80	108		昭和9年 (1934年)	5月 16日		鹿児島県 小宝島	①③台紙記載参照 ②「旅譜」p434	・国際常民文化研究所機構研究グループ1-3 板井氏現地調査(2011年7月29日)により被写体の人物は「岩下亀熊・ウシ夫妻 (ウシの旧姓は金城、通商カネ、沖縄県国頭村奥間出身、1964年鹿児島県串木野にて没)、岩下英雄 (故人)、信夫 (小宝島に健在)、哲雄 (故人)、節子 (鹿児島市に健在)」と判明 ・写3-4-7にネガフィルムあり
ア 39 41	探訪(10) 高橋氏 粟島 面	粟島丸船上の高橋文太郎と早川孝太郎	1427 (青イソク、ナンバリング) 粟島へ向って (鉛筆)	56	78		昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日		新潟県 岩船郡 粟島 へ向かう 船上	①③④備考参照	・ア-39-42と同状況での写真、高橋と早川が写っており、ア-39-42には村上が写っている、撮影者は敬三カ ・ア-39-44に「粟島丸を望む」と台紙記載があり、粟島上陸に促った船の名前カ ・「越後粟島探訪録」p12に「同島滞在は昭和八年五月二十二日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日夕方カ、24日朝カ、地蔵や年月日はこれによつた。

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 39 42	探訪(10) 高橋氏 栗島	栗島丸船上の村上清 文	1428 (青インク、ナ ンバリソング) 栗島へ向って (鉛筆)	56	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日	新島 岩 船郡 栗島 へ向かう 船上	①②③備考参照	・ア-39-41と同状況での写真、村上が写っている、ア-39-41は高橋と早川が写っている、撮影者は敬三カ ・ア-39-44に「栗島丸を望む」と台紙記載があり、栗島上陸に使った船の名前カ ・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日夕方から24日朝迄、地域や年月日はこれによつた	
7 39 46	探訪(10) 高橋氏 栗島	雪小屋	1433 (青インク、ナ ンバリソング) 栗島内浦にて、雪小 屋 (鉛筆)	57	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日	栗島 浦村 内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・雪小屋については詳細不明 ・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日～24日の撮影カ ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三 面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70 ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70× 100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ	
7 39 47	探訪(10) 高橋氏 栗島	シダが繁茂する墓地	1434 (青インク、ナ ンバリソング) 栗島内浦にて 墓地 (鉛筆)	56	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日	栗島 浦村 内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日～24日の撮影カ ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三 面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70 ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70× 100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ	
7 39 50	探訪(10) 高橋氏 栗島	浜から出漁する船と それを見送る子供た ち	1437 (青インク、ナ ンバリソング) 栗島内浦にて (鉛筆)	57	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日	栗島 浦村 内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、ア-39-48と関連した写真と考えられ、ア-39-48の写真左手 奥に栗島丸と考えられる船が見え、撮影日は船で渡った21日、あるいは船で 帰る24日カ ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種 類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三 面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70 ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70× 100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ	
7 39 51	探訪(10) 高橋氏 栗島	船上から見る浜から 出漁する船団	1438 (青インク、ナ ンバリソング) 栗島内浦にて (鉛筆)	56	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日	栗島 浦村 内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、ア-39-48と関連した写真と考えられ、当該写真は船上から みたアングルであり栗島丸船上での写真と考えられる、また、ア-39-48の写 真左手奥に栗島丸と考えられる船が見え、撮影日は船で渡った21日、あるいは は船で帰る24日カ ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種 類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三 面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70 ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70× 100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ	
7 39 52	探訪(10) 高橋氏 栗島	栗島内浦村集落の通 り	1439 (青インク、ナ ンバリソング) 栗島内浦にて (鉛筆)	78	57	昭和8年 (1933年)	5月 21日、24日	栗島 浦村 内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日～24日の撮影カ ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種 類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三 面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70 ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70× 100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ	

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 39 53	探訪(10) 高橋氏 栗島	浜に地引網漁を見に来た小学校の先生と生徒たち	1440 (青イニング、ナ ンバリング) 栗島内浦 (鉛筆) 小校の生徒 (鉛筆)	56	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日	5月 24日	栗島内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日～24日の撮影カ ・「越後栗島探訪録」p.4に「地曳網漁は現在も残つてゐるには居るが、時田偶庵みに曳く程度。滞在の時も、部落の女達大勢交つて曳いた日があつたが、殆ど獲物は無かつた。珍らしいので観手も多く、後に記すヤスマイヤドのことなど聞いた鳥生れの先生も来て見てみた1人の。」とあり、題名はこれによつた ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70×100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ
7 39 54	探訪(10) 高橋氏 栗島	浜に地引網漁を見に来た小学校の生徒たち	1440 (青イニング、ナ ンバリング) 栗島内浦 小校の生徒 (鉛筆)	56	78	昭和8年 (1933年)	5月 21日	5月 24日	栗島内浦	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「越後栗島探訪録」p.12に「同島滞在は昭和八年五月二十一日夕より二十四日朝迄」とあり、船で渡った21日～24日の撮影カ ・「越後栗島探訪録」p.4に「地曳網漁は現在も残つてゐるには居るが、時田偶庵みに曳く程度。滞在の時も、部落の女達大勢交つて曳いた日があつたが、殆ど獲物は無かつた。珍らしいので観手も多く、後に記すヤスマイヤドのことなど聞いた鳥生れの先生も来て見てみた1人の。」とあり、題名はこれによつた ・栗島の印画紙は「50×70ミリ代」「70×100ミリ代」「40×60ミリ代」の三種類で、ア-39-41には高橋と早川が、42には村上が写り、栗島を含む越後三面調査(昭和8年5月19日～24日)の調査者で写っていない敬三が「50×70ミリ代」撮影カ。また、アルバムで高橋撮影と判明している印画紙が「70×100ミリ代」であり、残りの「40×60ミリ代」は早川・村上カ
7 55 1	朝鮮	道を行く民族衣装を着た人と荷を積んだ牛	1996 (ナンバリング、 青イニング) 昭和(大正)8.12. 沢沢先生撮影(「昭和」 は鉛筆)	78	106	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照	・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 沢青淵翁須翁徳徳除幕式」による ・写-3-3-4にネガフィルムあり
7 55 2	朝鮮	竹藪のようなものでできた杓子や朝られた洗い桶のようなもの、白いものが入った鉢、石臼など	1997 (ナンバリング、 青イニング) 昭8.12 沢沢先生撮影	79	105	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照	・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 沢青淵翁須翁徳徳除幕式」による ・写-3-20-1にネガフィルムあり
7 55 3	朝鮮	調査団のような人と地元の人々、犬	1999 (ナンバリング、 青イニング) 昭8.12 沢沢先生撮影	79	106	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照	・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 沢青淵翁須翁徳徳除幕式」による ・写-3-3-3にネガフィルムあり
7 55 4	朝鮮	軒先にある朝られた丸太のようなもの	2000 (ナンバリング、 青イニング) 昭8.12 沢沢先生撮影	78	106	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照	・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 沢青淵翁須翁徳徳除幕式」による ・写-3-3-1にネガフィルムあり
7 55 5	朝鮮	集落内の大きな木の前で写る人、板塀	2001 (ナンバリング、 青イニング) 昭8.12 沢沢先生撮影	80	106	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照	・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 沢青淵翁須翁徳徳除幕式」による ・写-3-3-5にネガフィルムあり

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 55 6	朝鮮	竹籠のようなものでできた杓子や列られた洗い桶のようなものなど	2003 (ナンパバリング、青イंक) 昭8.12 渋沢先生撮影	80	106	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照 ・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 渋沢青淵翁顕徳碑除幕式」による ・写3-20-2にネガフィルムあり	
7 55 7	朝鮮	納屋のようなもの前に立つ男、犬	2004 (ナンパバリング、青イंक) 昭8.12 渋沢先生撮影	78	105	昭和8年 (1933年)	12月		朝鮮	①②台紙記載参照 ③備考参照 ・地域は台紙記載の昭和8年12月より「旅譜」p.433-434を参照、「朝鮮 渋沢青淵翁顕徳碑除幕式」による ・写3-3-2にネガフィルムあり	
7 116 1	記載なし	噴起湖にて家屋の軒先を覗く一行	噴起口 (白イंक)	72	99	大正15年 (1926年)	4月	25日	噴起湖	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による ・台紙記載や「南島見聞録」・「旅譜」写真キャプションは「噴起口」だが、「南島見聞録」本文及び「旅譜」本文の「噴起湖」という (現在と同じ) 表記とした	
7 116 2	記載なし	噴起湖駅にて汽車を待つ阿里山生蕃		72	99	大正15年 (1926年)	4月	25日	噴起湖	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による	
7 116 2 1-2	記載なし	十字路にて阿里山生蕃の男女と日本の一頭目の記念撮影		72	98	大正15年 (1926年)	4月	25日	台湾十字路	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による	
7 116 2 2-1	記載なし	十字路にて阿里山生蕃の記念撮影 (左側より男性を中心に)		72	99	大正15年 (1926年)	4月	25日	台湾十字路	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による	
7 116 2 2-2	記載なし	十字路にて阿里山生蕃の記念撮影 (右側より女性を中心に)		72	98	大正15年 (1926年)	4月	25日	台湾十字路	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による	
7 116 3 1	記載なし	十字路にて阿里山生蕃の記念撮影 (男性)		72	99	大正15年 (1926年)	4月	25日	台湾十字路	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による	
7 116 3 2	記載なし	阿里山鉄道の車窓より		72	99	大正15年 (1926年)	4月	25日	阿里山	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による	
7 116 4 1-1	記載なし	台湾山間部の遠景		72	98	大正15年 (1926年)	4月	24日	台湾	①②③備考参照 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90-100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は同書から敬三が撮影可能となる大日本米穀会大会3日目から台湾を離れる5月2日までとした ・地域は阿里山軽便鉄道車窓から撮影	

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7	116 4 1-2 記載なし	台湾山間部の建築物と男性			72	98	大正15年(1926年)	4月24日	5月2日	台湾	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は同書から敬三が撮影可能となる大日本米穀会大会3日目から台湾を離れる5月2日までとされた。 ・地域は阿里山軽便鉄道車窓から撮影カ
7	116 4 2-1 記載なし	草山貴賓館前にて記念撮影	草山ニテ(白インク)		74	100	大正15年(1926年)	5月1日		台湾 草山 貴賓館	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、ネガフィルム(河1-30-2-9-7)が残っていることから撮影者は敬三カ。年月日・地域は同書p.77による
7	116 4 2-2 記載なし	草山貴賓館洋館ペランダにて記念撮影			74	100	大正15年(1926年)	5月1日		台湾 草山 貴賓館	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、ネガフィルム(河1-30-2-9-8)が残っていることから撮影者は敬三カ。年月日・地域は同書p.77による
7	116 5 1-2 記載なし	草山貴賓館洋館ペランダにて記念撮影			74	100	大正15年(1926年)	5月1日		台湾 草山 貴賓館	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書p.77による
7	116 5 2 記載なし	水辺の淵の筆筒樹(蛇木)の前に座る石黒忠篤			98	72	大正15年(1926年)	4月22日		台湾 総督 府民政長 官官邸	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影カ、水辺の淵に座るのは石黒 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	116 6 1 記載なし	台北州七星郡士林庄の農夫阿氏	小作人 阿阿會氏(白インク)		72	98	大正15年(1926年)	4月23日		台北州七星郡士林庄 字林子 口	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
7	118 6 1-1 記載なし	十字路にて阿里山生番の男女と日本の一頭目の記念撮影			75	100	大正15年(1926年)	4月25日		台湾 十字 路	・台紙記載「41-205」はシールの上に書かれている ・年月日・地域は「南島見聞録」p.32及び「旅譜」p.411による
7	116 6 1-2 記載なし	台北州七星郡士林庄の中農の家屋			72	99	大正15年(1926年)	4月23日		台北州七星郡士林庄 字林子 口	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、ネガフィルム(河1-30-5-10)が残っていることから撮影者は敬三カ。年月日・地域は同書による
7	116 6 2 記載なし	台北州七星郡士林庄の中農の家屋	中百姓(白インク)		72	98	大正15年(1926年)	4月23日		台北州七星郡士林庄 字林子 口	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
7	116 7 1-1 記載なし	台北州七星郡士林庄の地主簡氏と家屋	業主 簡春輝氏 林庄林子口(白インク)		72	99	大正15年(1926年)	4月23日		台北州七星郡士林庄 字林子 口	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び台紙記載による
7	116 7 1-2 記載なし	台北州七星郡士林庄の地主簡氏の家屋			72	98	大正15年(1926年)	4月23日		台北州七星郡士林庄 字林子 口	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び台紙記載・ア-116-7-1-1による
7	116 7 2-1 記載なし	台北州七星郡士林庄の地主簡氏の家屋を調査する一行			98	72	大正15年(1926年)	4月23日		台北州七星郡士林庄 字林子 口	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は同書及びア-116-7-1-2による。地域及び題名は被写体の家屋の造りや背景から台北州七星郡士林庄の地主簡氏の家屋カ

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 116	7 2-2 記載なし	台北市七星郡士林庄の地主簡氏の家屋内の正堂カ		72	99	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市七星郡士林庄字林子口	①②備考参照 ③「南島見聞録」p.25	・アルバム前後の資料から台北市七星郡士林庄の地主簡氏の家屋内の正堂カ 〔南島見聞録〕p.24-27 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-7-1-2による
7 116	8 1-1 記載なし	台北市郊外板橋の花崗岩の石臺三百坪ほどを有する林氏邸の埕	林本源氏邸 埕(白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書に よる
7 116	8 1-2 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の棟カ		72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ〔南島見聞録〕 p.29-30 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-8-1-1による
7 116	8 2-1 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の石臺の廊下カ		99	72	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ〔南島見聞録〕 p.29-30 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-8-1-1による
7 116	8 2-2 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の客殿及び歩廊	客殿及び歩廊(白インク)	71	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書に よる
7 116	9 1-1 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の釣殿カ	釣殿(白インク)	71	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ〔南島見聞録〕 p.29-30 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-8-1-1による
7 116	9 1-2 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の複道	複道(白インク)	72	99	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書に よる
7 116	9 2-1 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の舞台	舞台(白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ〔南島見聞録〕 p.29-30 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書に よる
7 116	9 2-2 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の池と小径		72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書に よる
7 116	10 1-1 記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の池とそこにかかるとる橋カ		72	99	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ〔南島見聞録〕 p.29-30 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同 法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-8-1-1による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 116 10 1-2	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の舞台カ		72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ(「南島見聞録」p.29-30) ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
7 116 10 2	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の穀倉カ	穀倉(白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ(「南島見聞録」p.29-30) ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
7 116 11	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の石廊下と庭カ		72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏の邸内カ(「南島見聞録」p.29-30) ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
7 117 1 1	記載なし	扶桑丸の甲板での一行	扶桑丸甲板ニテ(白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 18日	4月 22日	神戸基隆間の台湾航路	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。在路の船上での撮影のため年月日は神戸発基隆着までの間・地域も同航路とした
7 117 1 2-1	記載なし	扶桑丸の甲板での一行カ		72	98	大正15年 (1926年)	4月 18日	4月 22日	神戸基隆間の台湾航路	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から往路扶桑丸上での撮影カ(「南島見聞録」p.12-15) ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-1による
7 117 1 2-2	記載なし	扶桑丸の甲板での一行カ		99	72	大正15年 (1926年)	4月 18日	4月 22日	神戸基隆間の台湾航路	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から往路扶桑丸上での撮影カ(「南島見聞録」p.12-15) ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-1による
7 117 2 1-1	記載なし	台湾総督府遺景	総督官邸(白インク)	99	72	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督官邸	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
7 117 2 2-1	記載なし	台湾総督府を背に水辺の傍にかがむ後藤文夫民政長官		99	72	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7 117 2 2-2	記載なし	台湾総督府を望む洋館のテラス		99	72	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7 117 3 1-1	記載なし	庭園にて後藤文夫民政長官(左)、農林省農務局長石黒忠篤(右)の記念撮影	○(赤鉛筆)	98	72	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7	117	3 1-2	記載なし	建築物前にて記念撮影	73	100	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾総督府民政長官邸	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	117	3 2-1	記載なし	建築物前にて記念撮影	72	99	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾総督府民政長官邸	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	117	3 2-2	記載なし	台湾総督府を望む洋館のテラス	98	72	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾総督府民政長官邸	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	117	4 1-1	記載なし	水辺の淵の筆筒樹(蛇木)の前に座る石黒忠篤	101	74	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾総督府民政長官邸	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影 ・水辺の淵に座るのは石黒 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	117	4 1-2	記載なし	台湾総督府博物館前にて記念撮影	101	74	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾総督府博物館	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は「南島見聞録」及び「旅譜」p.411によるが、訪問した可能性のある大正15年4月22日と30日を併記した
7	117	4 2-1	記載なし	台湾総督府博物館前にて記念撮影	101	74	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾総督府博物館	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は「南島見聞録」及び「旅譜」p.411による
7	117	4 2-2	記載なし	大稲埕の加藤氏経営の家鴨卵人工孵化場	72	98	大正15年 (1926年)	4月 23日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は同書及び「旅譜」p.411による
7	117	5 1-1	記載なし	大稲埕の永楽町市場	73	100	大正15年 (1926年)	4月 23日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は同書及び「旅譜」p.411による
7	117	5 1-2	記載なし	台北橋	72	98	大正15年 (1926年)	4月 22日	台北橋	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内移動可能な大正15年4月22~24日、5月1~2日とした
7	117	5 2-1	記載なし	淡水河	72	99	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾淡水河	①③備考参照 ②台紙記載参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内移動可能な大正15年4月22~24日、5月1~2日とした
7	117	5 2-2	記載なし	大稲埕の山車行列カ	72	98	大正15年 (1926年)	4月 22日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内移動可能な大正15年4月22~24日、5月1~2日とした



目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 117 6 1-1	記載なし	大稲埕の山車行列カ	程稲大 (白インク)	73	99	大正 15 年 (1926 年)	4 月 22 日	5 月 2 日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15 年 4 月 22 ~ 24 日、5 月 1 ~ 2 日とした
7 117 6 1-2	記載なし	大稲埕の山車行列カ		72	100	大正 15 年 (1926 年)	4 月 22 日	5 月 2 日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15 年 4 月 22 ~ 24 日、5 月 1 ~ 2 日とした
7 117 6 2-1	記載なし	大稲埕の山車行列カ		72	99	大正 15 年 (1926 年)	4 月 22 日	5 月 2 日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15 年 4 月 22 ~ 24 日、5 月 1 ~ 2 日とした
7 117 6 2-2	記載なし	大稲埕の茶商陳悦記宅	大稲埕 茶商 陳悦記宅 (白インク)	72	99	大正 15 年 (1926 年)	4 月 23 日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譚」p411 による
7 117 7 1-1	記載なし	大稲埕の茶商陳悦記宅		74	100	大正 15 年 (1926 年)	4 月 23 日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕の茶商陳悦記宅カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譚」p411 による
7 117 7 1-2	記載なし	台湾の売卜者		74	100	大正 15 年 (1926 年)	4 月 22 日	5 月 2 日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15 年 4 月 22 ~ 24 日、5 月 1 ~ 2 日とした
7 117 7 2-1	記載なし	台湾のしんこや	しんこや (白インク)	74	101	大正 15 年 (1926 年)	4 月 22 日	5 月 2 日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15 年 4 月 22 ~ 24 日、5 月 1 ~ 2 日とした
7 117 7 2-2	記載なし	嘉南大圳を望む一行		72	98	大正 15 年 (1926 年)	4 月 27 日		嘉南大圳	①②③備考参照	・ア-117-8-1-2 に見える山の稜線と本資料に写る山の稜線が同じことから台南嘉南大圳における写真カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譚」p411 による
7 117 8 1-1	記載なし	嘉南大圳を望む一行		72	98	大正 15 年 (1926 年)	4 月 27 日		嘉南大圳	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台南嘉南大圳における写真カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譚」p411 による
7 117 8 1-2	記載なし	嘉南大圳を望む	嘉南大圳 (白インク)	72	98	大正 15 年 (1926 年)	4 月 27 日		嘉南大圳	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譚」p411 による
7 117 8 2	記載なし	嘉南大圳におけるハイドロリックフィルム式工事		72	99	大正 15 年 (1926 年)	4 月 27 日		嘉南大圳	①②③備考参照	・「南島見聞録」p50 に「嘉南大圳ハイドロリックフィルム式工事」として別角度からの写真あり ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70 × 90 ~ 100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譚」p411 による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 117 9 1	記載なし	台南文廟の正門	文廟 正門 (白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 27日		台南文廟	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 10 1	記載なし	台南文廟の扁額「斯文在茲(光緒帝)」 「聖神天樂(同治帝)」	文廟 楽器 (白インク)	99	72	大正15年 (1926年)	4月 27日		台南文廟	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 10 2-1	記載なし	台南文廟の大成就正面向かって右側部分		99	72	大正15年 (1926年)	4月 27日		台南文廟	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 10 2-2	記載なし	台南の公会堂の裏庭	台南 公会堂 (白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 27日	4月 28日	台南公会堂	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日は同書及び「旅譜」p411により台南市内で移動可能な大正15年4月27~28日とした
7 117 11 1-1	記載なし	台南州農事試験所に て台南農民の豊年踊り	祭年豊 (白インク、 右から記載)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 28日		台南州農事試験所	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 11 1-2	記載なし	台南州農事試験所に て台南農民の豊年踊り		72	98	大正15年 (1926年)	4月 28日		台南州農事試験所	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 11 2	記載なし	安平の町並みを望む	○(赤鉛筆) 豊年踊り (白インク) 安平 (白インク)	72	98	大正15年 (1926年)	4月 28日		台湾安平	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 12 1-1	記載なし	台中の土壘間(穀摺業者)	台中 間壘軒 (白インク)	72	99	大正15年 (1926年)	4月 30日		台中	①②③備考参照	・台紙記載のうち「間壘軒」は「土壘間」の誤り ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 12 1-2	記載なし	高雄州のパイナップル畑		72	98	大正15年 (1926年)	4月 29日		高雄	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾高雄州九曲堂におけるパイナップル工場見学時の撮影 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 117 12 2	記載なし	高雄州のパイナップル畑		72	98	大正15年 (1926年)	4月 29日		高雄	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾高雄州九曲堂におけるパイナップル工場見学時の撮影 ・「南島見聞録」p17では、石黒が同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7 118 2 1-1	記載なし	台湾総督官邸遠景	総督官邸 (白インク)	101	75	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督官邸	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
7 118 2 2-1	記載なし	台湾総督府を背に水 辺の傍にかがむ後藤 文夫民政長官	台湾総督 府民政長 官官邸	100	73	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影 ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7	118 2 2-2	台北橋	台北橋 (白インク)	74	100	大正 15年 (1926年)	4月 22日	5月 2日	台北橋	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15年 4月 22~24日、5月 1~2日とした
7	118 3 1-1	淡水河	淡水河 (白インク)	74	100	大正 15年 (1926年)	4月 22日	5月 2日	台湾淡水河	①②備考参照 ③台紙記載参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15年 4月 22~24日、5月 1~2日とした
7	118 3 1-2	大稲埕の茶商陳悅記宅	大稲埕 茶商 陳悅記宅 (白インク)	75	101	大正 15年 (1926年)	4月 23日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7	118 3 2-1	大稲埕の茶商陳悅記宅	大稲埕の茶商陳悅記宅 (白インク)	73	100	大正 15年 (1926年)	4月 23日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕の茶商陳悅記宅カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7	118 3 2-2	大稲埕の永楽町市場	永楽町市場 (白インク)	74	100	大正 15年 (1926年)	4月 23日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7	118 4 1-1	大稲埕の加藤氏経営の養鴨卵人工孵化場	加藤氏経営 養鴨卵人工孵化場 (白インク)	75	101	大正 15年 (1926年)	4月 23日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による
7	118 4 1-2	台湾の売卜者	賣卜者 (白インク)	74	100	大正 15年 (1926年)	4月 23日		台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15年 4月 22~24日、5月 1~2日とした
7	118 4 2-1	台湾のしんこや	しんこや (白インク)	74	100	大正 15年 (1926年)	4月 22日	5月 2日	台湾大稲埕	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾台北市大稲埕における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日は台北市内で移動可能な大正 15年 4月 22~24日、5月 1~2日とした
7	118 4 2-2	建築物前にて記念撮影	建築物前にて記念撮影	75	100	大正 15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	118 5 1-1	建築物前にて記念撮影	建築物前にて記念撮影	74	101	大正 15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台湾総督府後藤文夫民政長官官邸の庭園における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
7	118 5 1-2	噴起湖にて家屋の軒先を覗く一行	噴起湖にて家屋の軒先を覗く一行 (白インク)	73	100	大正 15年 (1926年)	4月 25日		噴起湖	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p411による台紙記載や「南島見聞録」：「旅譜」写真キャプションは「噴起口」だが、「南島見聞録」本文及び「旅譜」本文の「噴起湖」という(現在と同じ)表記とした

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考	
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日				
7 118 5 2-1	記載なし	阿里山鉄道の車窓より		74	100	大正15年 (1926年)	4月	25日 4月	26日	阿里山	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411によるが、年月日は阿里山沼の平までの往復日程4月25・26日とした
7 118 5 2-2	記載なし	台湾山間部の建築物と男性		74	101	大正15年 (1926年)	4月	24日	5月	台湾	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411によるが、年月日は一行が山間地を撮影可能な敬三3日目から台湾を離れる5月2日までとした
7 118 6 1-1	記載なし	十字路にて阿里山生蕃の男女と日本の一頭目の記念撮影	41-205	75	100	大正15年 (1926年)	4月	25日		台湾十字路	①「南島見聞録」p.44 ②③備考参照	・台紙記載はシールが貼られその上に書かれている ・年月日・地域は「南島見聞録」p.32及び「旅譜」p.411による
7 118 6 1-2	記載なし	十字路にて阿里山蕃の記念撮影(左側より男性を中心に)		74	100	大正15年 (1926年)	4月	25日		台湾十字路	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 6 2-2	記載なし	噴起湖駅にて汽車を待つ阿里山生蕃		73	100	大正15年 (1926年)	4月	25日		噴起湖	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 7 1-1	記載なし	噴起湖駅にて汽車を待つ阿里山生蕃		75	100	大正15年 (1926年)	4月	25日		噴起湖	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 7 1-2	記載なし	嘉南大圳を望む	嘉南大圳(白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月	27日		嘉南大圳	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 7 2-1	記載なし	嘉南大圳を望む一行		73	100	大正15年 (1926年)	4月	27日		嘉南大圳	①②③備考参照	・アルバム前後の資料から台南嘉南大圳における写真カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 7 2-2	記載なし	嘉南大圳におけるハイドロリックフィルム式工事		74	101	大正15年 (1926年)	4月	27日		嘉南大圳	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.50に「嘉南大圳ハイドロリックフィルム式工事」として別角度からの写真あり ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 8 1-1	記載なし	嘉南大圳におけるハイドロリックフィルム式工事		74	100	大正15年 (1926年)	4月	27日		嘉南大圳	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.50に「嘉南大圳ハイドロリックフィルム式工事」として別角度からの写真あり ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による
7 118 8 1-2	記載なし	嘉南大圳大士殿の中心をなすコンクリートコア		73	100	大正15年 (1926年)	4月	27日		嘉南大圳	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及び「旅譜」p.411による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 118 8 2-1	記載なし	嘉南大圳を望む一行		75	101	大正15年 (1926年)	4月 27日		嘉南大圳	①②③備考参照	・ア-117-8-1-2に見えらるる山の稜線と本資料に写る山の稜線が同じことから 南嘉南大圳における写真カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 8 2-2	記載なし	台南文廟の半月池	文廟 半月池(白イ ンク)	74	101	大正15年 (1926年)	4月 27日		台南文廟	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 9	記載なし	台南文廟の大成正 面向かって右側部分	台南 孔子廟(白イ ンク) 文廟 祭器(白イ ンク)	101	74	大正15年 (1926年)	4月 27日		台南文廟	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 10 1	記載なし	台南の公会堂の裏庭	文廟 正門(白イ ンク) 台南 公会堂(白イ ンク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月 27日	4月 28日	台南文廟	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411により台南市内で移動可能な大正15年4月27-28日とした
7 118 10 2	記載なし	台南州農事試験所に て台南農民の豊年踊 り	台南州農 事試験所 豊年踊り(白イ ンク)	73	100	大正15年 (1926年)	4月 28日		台南州農 事試験所	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 11 1-1	記載なし	台南州農事試験所に て台南農民の豊年踊 り	台南州農 事試験所 豊年踊り(白イ ンク)	75	101	大正15年 (1926年)	4月 28日		台南州農 事試験所	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 11 1-2	記載なし	安平の町並みを望む	安平(白イ ンク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月 28日		台湾安平	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 11 2-1	記載なし	台中の土壘間(概摺 業者)	台中 土壘軒(白イ ンク)	73	100	大正15年 (1926年)	4月 30日		台中	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 び「旅譜」p411による
7 118 11 2-2	記載なし	台北州七星郡士林庄 の地主簡氏と家屋	業主 簡春蟬氏 士林林子口(白イ ンク)	75	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北州七 星郡士林 庄林子 口	①②備考参照 ③「南島見聞録」 p.25	・アルハム前後の資料から台北州七星郡士林庄の地主簡氏の家屋内の正堂カ ・「南島見聞録」p24-27
7 118 12 1	記載なし	台北州七星郡士林庄 の地主簡氏の家屋内 の正堂カ	中百姓(白イ ンク)	73	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北州七 星郡士林 庄林子 口	①②備考参照 ③「南島見聞録」 p.25	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-7-1-2による
7 118 12 2-1	記載なし	台北州七星郡士林庄 の中農の家屋		74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北州七 星郡士林 庄林子 口	①②備考参照 ③「南島見聞録」 p.25	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及 びア-116-7-1-2による
7 118 12 2-2	記載なし	台北州七星郡士林庄 の農夫阿氏	小作人 阿阿會氏(白 イ ンク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北州七 星郡士林 庄林子 口	①②備考参照 ③「南島見聞録」 p.25	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、 同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書挿絵写真と同 法量(70×90-100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書に よる

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
ア 118 13 1-1	記載なし	台湾総督府を望む洋館のテラス		100	75	大正15年 (1926年)	4月 22日		台湾総督府民政長官官邸	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台湾総督府後藤民政長官官邸の庭園における撮影カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-117-2-1-2による
ア 118 13 1-2	記載なし	台北市郊外板橋の花崗岩の石臺三百坪ほどを有する林氏邸の塋	林本源氏邸 塋(白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
ア 118 13 2-1	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の棟カ		74	101	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 13 2-2	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の石臺の廊下カ		101	74	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 14 1-1	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の穀倉	穀倉(白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 14 1-2	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の複道	複道(白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
ア 118 14 2-1	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の釣殿カ	釣殿(白インク)	75	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 14 2-2	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の池とそこにかかる橋カ		74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 15 1-1	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の石廊下と庭カ		74	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 15 1-2	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の舞台カ		73	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・アルハム前後の資料から台北市郊外板橋の林本源氏邸内カ ・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書及びア-116-8-1-1による
ア 118 15 2-1	記載なし	台北市郊外板橋の林氏邸の舞台	舞台(白インク)	73	100	大正15年 (1926年)	4月 23日		台北市板橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(70×90~100ミリ代)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始	年	開始			
7 118	15 2-2 記載なし	台北市郊外板橋の林 氏邸の客殿及び歩廊	客殿及歩廊(白イン ク)	74	100	4月	大正15年 (1926年)	23日	台北市板 橋	①②③備考参照	・「南島見聞録」の台湾では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は同書による
7 119	1 記載なし	西表島遠景	西表遠望(白インク)	75	100	5月	大正15年 (1926年)	2日	沖縄県西 表島沖	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖縄では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.82-84による
7 119	2 1 記載なし	石垣島遠景	石垣島(白インク)	74	100	5月	大正15年 (1926年)	3日	沖縄県石 垣島沖	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖縄では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.96-99、106による
7 119	2 2 記載なし	石垣島拝所の門の屋 根	○(赤鉛筆) 拝之所(白インク)	74	100	5月	大正15年 (1926年)	4日	沖縄県石 垣島四箇	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.100-101に「四箇の町端れの拝所(をがんじよ)に参拝する。」とあり
7 119	3 1 記載なし	石垣島拝所を見る男 達	○(赤鉛筆)	73	100	5月	大正15年 (1926年)	4日	沖縄県石 垣島四箇	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖縄では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101による
7 119	3 2 記載なし	ステナを着用の宮良 當整氏	宮良當整氏 ステナ 着用(白インク)	75	101	5月	大正15年 (1926年)	4日	沖縄県石 垣島	①②③備考参照	・奥に鳥居が見える、四箇の拝所とは真乙徳御嶽カ、「南島見聞録」p.100-101に「四箇の町端れの拝所(をがんじよ)に参拝する。」とあり
7 119	4 1 記載なし	豚小屋	○(赤鉛筆) 豚小屋(白インク)	74	100	5月	大正15年 (1926年)	4日	沖縄県石 垣島	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.106に「百良當整氏の御本家と云ふ宮良當整氏のお宅に参上した時、同氏が昔の衣冠をつけて見て下さったことや、(後略)」とあり
7 119	4 2 記載なし	荒物屋の女主人の入 墨	入墨(白インク)	101	74	5月	大正15年 (1926年)	4日	沖縄県石 垣島	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖縄では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.105-107による
7 119	5 1-1 記載なし	久吉丸から見たへぎ 船に乗る三人の男性		100	74	5月	大正15年 (1926年)	3日	沖縄県石 垣島沖	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.101に「荒物屋でアダパンバの草履を買つたり、其處の女主人の手の甲の痣を無理にせがんで写真に撮つたり、(後略)」とあり
7 119	5 1-2 記載なし	帆を張ったへぎ船	糸満船(白インク)	74	100	5月	大正15年 (1926年)	4日	石垣島名 蔵湾	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖縄では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101、105-106による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
7 119 5 2	記載なし	糸満のへぎ舟	○(赤鉛筆) 糸満漁業 タター チャ (白インク)	73	99	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	石垣島名 蔵湾	①「南島見聞録」 p.104 ②③備考参照	題名と地域は「南島見聞録」p.104 と 105 の間の写真キャプション、年月日は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.105-106 による	
7 119 6	記載なし	タターチャ漁を行う 糸満の人々		74	100	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	石垣島名 蔵湾	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101、105-106 による	
7 119 7 1-1	記載なし	タターチャ漁の船よ り漁を見る石黒忠篤		74	100	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	石垣島名 蔵湾	①②③備考参照	・タターチャ漁の網漁の様子、ア-119-7-2 と同状況の写真、石黒が漁の様子を覗いている (後ろ向き) ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101、105-106 による	
7 119 7 1-2	記載なし	タターチャ漁の船よ り漁を見る石黒忠篤		74	100	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	石垣島名 蔵湾	①「南島見聞録」 p.104 ②③備考参照	・タターチャ漁の網漁の様子、ア-119-7-1-1 と同状況の写真、石黒が漁の様子を覗いている (後ろ向き) ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101、105-106 による	
7 119 7 2-1	記載なし	へぎ船の上で膨らむ フグを二匹持つ男性		74	100	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	石垣島名 蔵湾	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101、105-106 による	
7 119 7 2-2	記載なし	タターチャ漁で集 まったへぎ船の集団 とそれに乗る糸満の 人々たち		74	100	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	石垣島名 蔵湾	①②③備考参照	・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.100-101、105-106 による	
7 119 8	記載なし	宮古島の井戸釣瓶	○(赤鉛筆) 井戸 七十尺 (白イ ンク)	100	73	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	沖繩県宮 古島	①「南島見聞録」 p.107 ②「旅譜」p.411、「南 島見聞録」p.107 ③「南島見聞録」 p.107	・「南島見聞録」p.107 に「地下四五十尺迄大きな穴を穿て人々はその底にたまる水を桶で汲み取り擔ひ上げて居る。而も之は飲料水には適しない洗濯水たるに至つては、以てその苦痛の如何に甚しいか想像が出来よう。(中略) 幾度か深い鑿井も試みられたが皆徒勞に終つて居る。全く彼等は雨で生きて居ると言つてよい。」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.107-109 による	
7 119 9 1-1	記載なし	ドイツ皇帝ウイヘルム 一世感齋碑の前 に並ぶ石倉忠篤ら一 行	カイザーウイヘルヘ ルム一世、感齋碑 (白 インク)	100	74	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	宮古島平 良町	①備考参照 ②「旅譜」p.411、「南 島見聞録」p.108 ③「南島見聞録」 p.108	・「南島見聞録」p.108 に「平良町の中央に大理石の大きな碑が立つて居る。之は一八七三年六月に獨逸の軍艦がこの近海で難破した時、純粋な宮古の人々は彼等漂流民を極めて親切に取り扱つたのでそのお禮としてウイヘルヘルム一世が特に感齋の意を表して建てられたものであつた。獨逸と漢文でその來歴が書いてあつた。」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.108 による	
7 119 9 1-2	記載なし	宮古上布の図案を書 き込む男性	上布 カスリ図案 (白 インク)	73	100	大正 15 年 (1926 年)	5 月 4 日	沖繩県宮 古島	①備考参照 ②「旅譜」p.411、「南 島見聞録」p.108 ③「南島見聞録」 p.108	・「南島見聞録」p.108 に「宮古はその上布を以て聞こえて居る。可愛らしい女の子が縮環を片手に例の石垣に、布一匹の長さを距て、差込んだ二本の竹に、糸を巻いては廻り、巻いては廻つて居るのを見と、ふと自分が維新前に立ち帰つた様な気分になる。」とあり、上布製作を見る関係上での写真カ ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2 のような同書掲載写真と同法量 (70×90~100 ミリ代) の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.108-109 による	



目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始	年	開始			
7 119 9 2	記載なし	宮古上布の糸を縁側でかしかけを使っている女性(背面)		74	100	大正15年 (1926年)	5月	4日	沖繩県宮古島	①備考参照 ②「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.108-109 ③「南島見聞録」p.108	・「南島見聞録」p.108に「古はその上布を以て閑こえて居る。可愛らしい女の子が絡環を片手に例の石垣に、布一匹の長さを距て、差込んだ二本の竹に、糸を巻いては帰りは帰つて居るのを見るとき、ふと自分が維新前に立ち帰つた様な気分になる。」とあり、上布製作を見る関係上での写真 ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.108-109による
7 119 10 1	記載なし	宮古上布を拵打ちする男性		101	74	大正15年 (1926年)	5月	4日	沖繩県宮古島	①備考参照 ②「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.109 ③「南島見聞録」p.109	・「南島見聞録」p.109に「拵の音も現実に聞いた」とあり、上布製作を見る関係上での写真 ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.108-109による
7 119 10 2	記載なし	那覇港から沖繩県庁舎までにあるとある集落の家々		74	100	大正15年 (1926年)	5月	5日	沖繩本島	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.118に「那覇の港——之も今までとは違つてちやんと岸壁に着いた」とあり、また同書p.119に「縣廳で中食を御馳走になる」とあり、ア-119-11が首里城城内であり、港から中食をとりその後首里城へ向かう途中の写真 ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.118-119による
7 119 11	記載なし	首里城城内のあか木の森と壁		74	100	大正15年 (1926年)	5月	5日	沖繩本島 首里城内	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.125に「寺を出ると道は城内の池へとつゞく。此の邊は一面にあか木の太木からなる森である」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.125による
7 119 12	記載なし	沖繩県庁で飼われているハブ		75	100	大正15年 (1926年)	5月	4日	沖繩県庁	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.119に「縣廳で中食を御馳走になる。有名な毒蛇ハブも血清を取る為に裏に数匹飼養されて居る。」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.119による
7 119 13 1-1	記載なし	島尻郡喜屋武の集落、石垣の前のいる女の子たち		74	100	大正15年 (1926年)	5月	5日	沖繩県島尻郡喜屋武	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.127-128に「我々一行は田村課長の御案内で、此の糸満町に立ち寄り更に島尻郡を一巡した。喜屋武、麻武仁等では極めて悲惨な水呑百姓を訪れたり、小学校を見たり、又黒砂糖を製造して居る所では糍と稱し、或るものは馬を、或るものは原料を、又あるものは労役を互に夫々持ち寄つて、何人か共同して製出し、之を販売して得た利益を右の持ち寄つた人々で按分して、分配する特殊の制度を眼のあたり拝見して興味深く算えた。」とあり、しかしここでは上記のものは写つておらず、石垣の前で子守や遊ぶ姿の女の子達を撮影したもの ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.127-128による
7 119 13 1-2	記載なし	島尻郡喜屋武の集落、民家		74	100	大正15年 (1926年)	5月	5日	沖繩県島尻郡喜屋武	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.127-128に「我々一行は田村課長の御案内で、此の糸満町に立ち寄り更に島尻郡を一巡した。喜屋武、麻武仁等では極めて悲惨な水呑百姓を訪れたり、小学校を見たり、又黒砂糖を製造して居る所では糍と稱し、或るものは馬を、或るものは原料を、又あるものは労役を互に夫々持ち寄つて、何人か共同して製出し、之を販売して得た利益を右の持ち寄つた人々で按分して、分配する特殊の制度を眼のあたり拝見して興味深く算えた。」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真 真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のような同書掲載写真と同法量(「70×90~100ミリ代」)の同地域撮影は敬三カ。年月日・地域は「旅譜」p.411、「南島見聞録」p.127-128による

目録番号	外表記載	題名 (推定含む)	台紙記載	写真法量		撮影年月日			撮影地	典拠 ①撮影者 ②撮影年月日 ③撮影地	備考
				縦	横	開始年	開始月日	終了月日			
ア 119 14 1-1	記載なし	黒糖製造、馬を使っている様子	黒糖製造 (白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	5月 5日	沖縄県島 津郡喜屋 武・摩文 仁	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.127-128に「我々一行は田村課長の御案内で、此の糸満町に立ち寄り更に島尻郡を一巡した。喜屋武、麻武仁等では極めて悲惨な水吞百姓を訪れたり、小学校を見たり、又黒砂糖を製造して所では統並と稱し、或るものは馬を、或るものは原料を、又あるものは労役を互に夫々持ち寄つて、何人かで共同して製出し、之を販売して得た利益を右の持ち寄つた人々で按分して、分配する特殊の制度を眼のあたり拝見して興味深く覚えた。」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のようない同書掲載写真と同法量(70×90ミリ代)の同地域撮影は敬三か。年月日・地域は「旅譜」p.411、 「南島見聞録」p.127-128による	
ア 119 14 1-2	記載なし	黒糖製造、馬を使っている締め機でサトウキビを絞る女性の様子	黒糖製造 (白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	5月 5日	沖縄県島 津郡喜屋 武・摩文 仁	①②③備考参照	・「南島見聞録」p.127-128に「我々一行は田村課長の御案内で、此の糸満町に立ち寄り更に島尻郡を一巡した。喜屋武、麻武仁等では極めて悲惨な水吞百姓を訪れたり、小学校を見たり、又黒砂糖を製造して所では統並と稱し、或るものは馬を、或るものは原料を、又あるものは労役を互に夫々持ち寄つて、何人かで共同して製出し、之を販売して得た利益を右の持ち寄つた人々で按分して、分配する特殊の制度を眼のあたり拝見して興味深く覚えた。」とあり ・「南島見聞録」の沖繩では、敬三の他、石黒も同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のようない同書掲載写真と同法量(70×90ミリ代)の同地域撮影は敬三か。年月日・地域は「旅譜」p.411、 「南島見聞録」p.127-128による	
ア 119 14 2-1	記載なし	薩南十島諏訪瀬島の鳥影、噴煙の様子	トカラ列島(沖ヶ瀬)(白インク)スワノセ(鉛筆)	74	101	大正15年 (1926年)	5月 6日	薩南十島 洋上	①②③備考参照	・1925(大正14)年5月に噴火していることから台湾・沖繩から帰る船の上で撮影か ・「南島見聞録」の鹿児島では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のようない同書掲載写真と同法量(70×90ミリ代)の同地域撮影は敬三か。年月日・地域は「旅譜」p.411による	
ア 119 14 2-2	記載なし	桜島の溶岩と遠景	桜島 Lava (白インク)	74	100	大正15年 (1926年)	5月 9日	鹿児島県 桜島	①②③備考参照	・「Lava」とは英語で溶岩のこと ・「南島見聞録」の鹿児島では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のようない同書掲載写真と同法量(70×90ミリ代)の同地域撮影は敬三か。年月日・地域は「旅譜」p.411による	
ア 119 15 1	記載なし	桜島の溶岩と遠景	桜島の溶岩と遠景	73	100	大正15年 (1926年)	5月 9日	鹿児島県 桜島	①②③備考参照	・「南島見聞録」の鹿児島では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のようない同書掲載写真と同法量(70×90ミリ代)の同地域撮影は敬三か。ア-119-14-2-2と同様の風景でありアルバムに綴られているところから題名はこれによった、年月日・地域は「旅譜」p.411による	
ア 119 15 2	記載なし	鹿児島湾に停泊する軍艦	鹿児島湾に停泊する軍艦	74	100	大正15年 (1926年)	5月 9日	鹿児島県 鹿児島湾 内洋上	①②③備考参照	・「南島見聞録」の鹿児島では、敬三の他、石黒、井野なども同行しているが、同書挿絵写真全てが敬三撮影であり、ア-119-5-2のようない同書掲載写真と同法量(70×90ミリ代)の同地域撮影は敬三か。アルバムに綴られているところから題名はこれによった、年月日・地域は「旅譜」p.411による	
写1 12 4	三面集(続)村上其他(続書)	天秤棒で魚を売る平テカツギ(行商人)と会話する高橋文太郎と早川孝太郎	No.8(鉛筆)1391(ナンパリング、青インク)←高橋文太郎(鉛筆、続書)早川孝太郎(鉛筆、ママ)続書)続書)続書)	59	83	昭和8年 (1933年)	5月 19日	山形県置 賜郡小国 町筋倉付 近	①②備考参照 ③台紙記載参照	・ナンパリングよりアルバム39から抜き出されたと考えられ、アルバム39全体が昭和8年5月に行われた敬三・高橋・早川・村上の山形県米沢から新潟県三面の調査であり、撮影者・年月日・地域などは「朝日山麓三面村記」による ・高橋「朝日山麓三面村記」p.62-63では「一行一沢沢敬三氏他三名。」とある。また、本資料には高橋、早川が写っており、『越後三面行』(No.6 0:01:18)には車中で眠る村上の様子と高橋が映されており、これらから一行は敬三・高橋・早川・村上とした。これにより撮影者は敬三または同行した村上か ・「朝日山麓三面村記」p.42に本資料についての記述があり、題名はこれによ	

